

鎌倉大仏殿

高德院 木造仁王像

平成修理報告書





鎌倉大仏殿 高德院 木造 仁王像 平成修理報告書



## はしがき

本書は鎌倉大仏殿高徳院を護持する仁王像一対および仁王門の修理報告書に当たる。拙僧が同修理事業を思い立ったのは、平成二十三年三月十二日。東日本大震災の翌日に遡る。震災発生時、仁王門脇に居合わせた者の証言によれば、仁王像は門内で激しく音を立てて揺れ、今にも倒れんばかりの有様であったという。そのためか、阿吽双方の像とも、翌日確認した時点ですでに天衣の一部が落下。吽像にあつては、額部の部材が外れた状態にあり、補修に急を要することは、誰の目にも明らかであった。

もつとも、前記の破損が果たして震災によって生じたものかは定かでない。というのも、平素仁王門を通る度掌を合わせながら、これまで仁王像の状態を気にかけたことは正直ほとんどなかった。門内に安置され、儉鈍の金網越しにしか拝せない阿吽各像については、細部の観察もままならず、経年劣化の把握に遅滞が生じたことも否めない。改めておもうに、屋下にこそあれ、しばしば風雨にも晒される仁王像ほど過酷な環境に置かれている木彫仏もなかるう。かかる仁王像に住職を拜命して以来観察を怠ってきたこと、不明の至りであり、誠に申し訳なくおもう。

幸いにも、急遽計画した同仁王像の解体修理作業は、地元鎌倉在住の彫刻家・瀧本光國氏のご門弟とともにその任に当たることをご快諾くださり、仏教美術史家・清水眞澄先生のご監修も仰いで進められる運びとなった。境内地の一角に作業小屋を仮設し、早くも平成二十三年の十月には着工に漕ぎ着けたが、江戸中期の作とみられる仁王像は、予想以上に劣化が進行しており、また、構造も複雑であったため、常時数名で作業を進めてなお、竣工までに二年余りの歳月を要した。それでも、その間、随所に工夫も凝らしつつ、丹念に修繕を図ったことにより、仁王像は、以後数百年に亘り尊容を保てるだけの堅牢さも備えたものと確信する。

また、阿吽各像については、それぞれ修理前・修理後の時点で、井上久美子氏に銀塩写真の撮影、株式会社テクネにVR画像の作成と三次元計測を依頼し、今後の調査・研究に資する記録ものこすことができた。加えて、解体中の部材の一部は、十文字美信氏による芸術写真の題材ともなった。さらに、仁王像の修理中には、仁王門についても倉山剛氏に補修を依頼、番匠井上有限会社の協力も得て、新装後の像を安置するにふさわしい優美な姿に整えた。それら各作業の報告に加え、清水眞澄先生、鈴木良明先生によるご高論も所収した本書は、仁王像に関する修理報告書としては過去に類をみない充実した書籍になったと自負する。

一連の作業にご尽力を賜った各位に厚く御礼申し述べるとともに、本書の編集にお力添え下さった株式会社便利堂の各位にも感謝申し上げます。はしがきにかえたい。合掌和南。

平成二十七年三月吉日



# 目次

はしがき	鎌倉大仏殿高德院住職 佐藤孝雄	3
修理完成写真		7
修理工程写真		27
修理図面		58
修理前の状況と修理の概要	(有)光圓美術研究所 瀧本光國	72
論考		
彫刻史から見た高德院仁王像について	清水眞澄	86
近世鎌倉大仏の復興と仁王像	鈴木良明	93
資料 仁王尊彩色及仁王門塗替日記會計帳		100
三六〇度フォトVRならびに三次元計測による御像外観の記録	(株)テクネ	104
仁王門・扁額修理について	創芸・(有)光圓美術研究所	108
あとがき	清水眞澄	112
修理関係者・協力者		113

## 例言

- 一 本書は平成二十三年から平成二十六年に実施された、鎌倉大仏殿高徳院木造仁王像平成修理事業の調査報告書である。
- 二 本書の修理像の名称は仁王像に統一した。
- 三 修理前・後の全身像写真は、井上久美子氏が撮影したものを掲載した。
- 四 十文字美信氏撮影の写真及び文「残欠」を二十六頁に掲載した。
- 五 修理工程写真・修理図面および仁王門扁額写真は、保存修理の施工にあたった(有)光圓美術研究所が撮影・制作したものを掲載した。
- 六 VR撮影・三次元計測写真は(株)テクネが撮影・制作したものを掲載した。
- 七 仁王門修理写真は、創芸が撮影したものを掲載した。
- 八 本書の記述は、原則として常用漢字、現代仮名遣いによった。ただし、固有名詞、歴史的用語、学術用語など慣例となっている表記についてはこの原則によっていない。
- 九 本文中の年月日には和暦を用い、( )内に西暦を記した。
- 十 関係者の所属は修理完成時。

修理完成写真

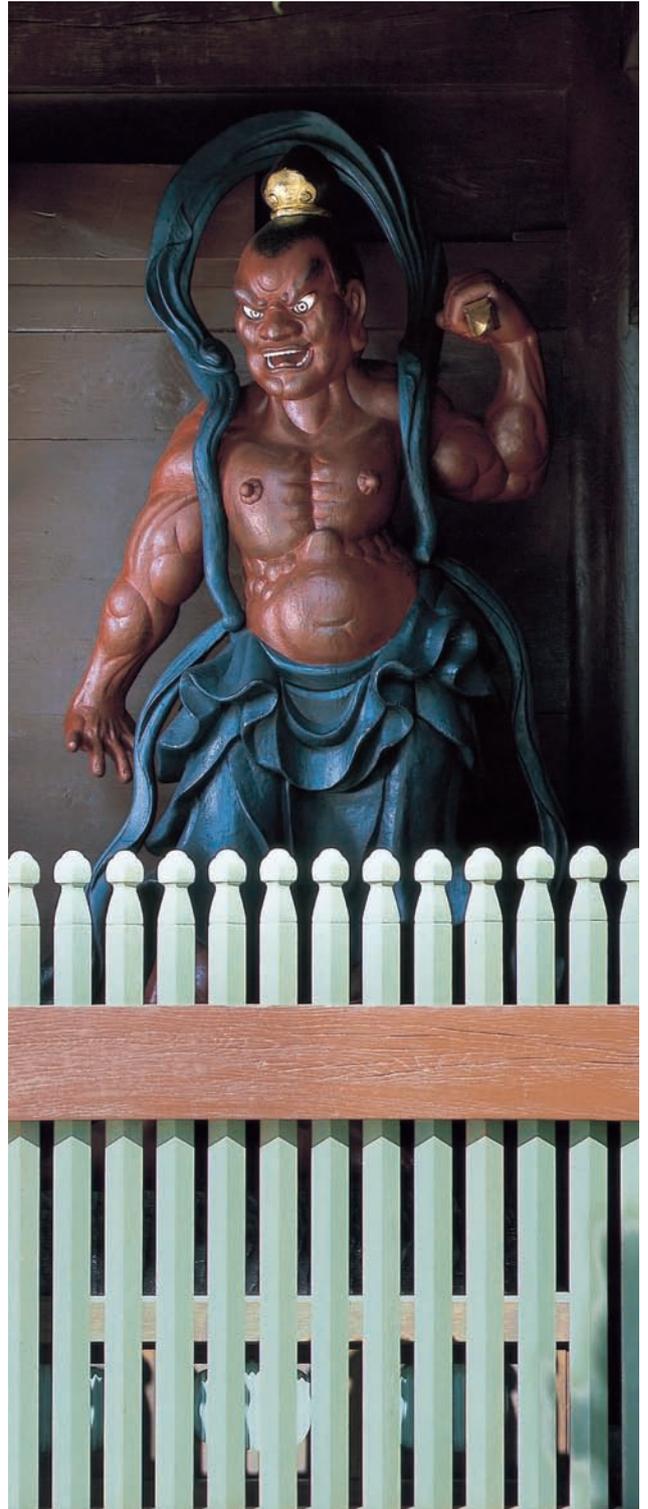




仁王門全景



仁王門 吽形像



仁王門 阿形像

































## 残欠

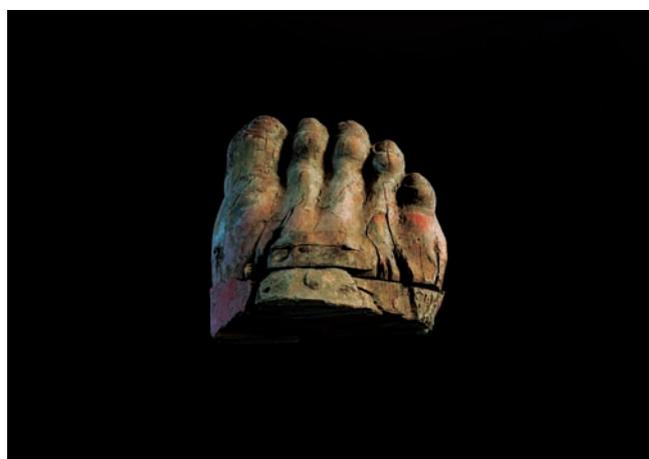
鎌倉高德院仁王像が約二年半の修復作業を経て、平成二十六年春に再び仁王門に戻ってきた。材木座在住の彫刻家瀧本光國さんが修復を担当された。修復前のある時期に、私は瀧本さんをお願いして、解体され作業場に横たわっている仁王像の部分や断片を拝観させていただいた。いわゆる「残欠」の状態です。

完全な姿であるときはもちろん仏像ですが、損壊したり解体されて断片になった「残欠」はもう仏像とはいえません。しかし私の目には只の部分にも見えなかった。仏像の断片という存在を超えて、正体不明の「生々しい何者か」になっていました。この時は吽像の足先に目を奪われました。十八世紀初めに造像されたと思われる高德院仁王吽像の足先に、三百年の時間が覆い被さり、私の想像を超えた姿に変化しているのです。

この「生々しさ」はいったい何か、気になって仕方ありません。仁王像の足先には見えず、人間の足先でもない。造像当時の仏師の心意気も微かながら感じられます。何かが生きて呼吸しているような、人間の意志を超えた圧倒的な時間の存在を感じます。崇高な一瞬に立ち会った気がするのです。確実に消滅に向かっていくモノ、無に還っていくひとつの過程を目撃した確信です。

修復が完成した仁王像は新しい生命が吹き込まれました。私が見た高德院仁王吽像の足先は、今では私の記憶の中でしか存在しません。

十文字美信



修理工程写真



修理前 全身

阿形像



3 修理前 背面



1 修理前 正面



4 修理前 右側面



2 修理前 左側面

修理前 部分



8 開梱直後の左体側部分



5 開梱直後の状況



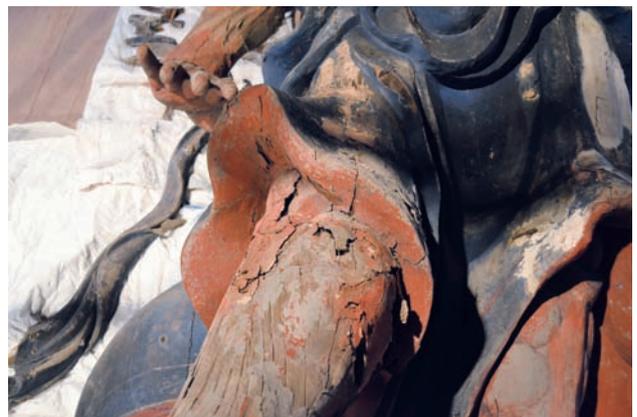
9 腹部の干割れと埋木



6 矧ぎ目の緩み彩色の剥落



10 左足先の損傷と部材の脱落



7 右膝彩色の剥落



14 体幹部より取り外された頭部



11 首柄と体部との間のマチ材を取り除く



15 面部と玉眼の損傷



12 頭部を体幹部より取り外す



16 右側面の損傷状況



13 緩んだ玉眼を解体前に取り外す



21 面部を取り外した状況



18 頭部解体後の状況



17 下から見た頭部内の束



22 眼の周辺を木屎漆で補強、整形



19 頭部の解体



23 新たに水晶製の玉眼を嵌入



20 欠損部分は新補、干割れは木屎漆を充填

右腕



28 彩色除去

左腕



24 彩色除去



29 全解体



25 全解体



30 右手 剥目やキレツの間隙には木屎漆を充填



26 左手 剥目や釘穴には木屎漆を充填



31 錆漆を施し、弁柄漆を塗布



27 錆漆を施し、弁柄漆を塗布



35 欠損部分を新補



32 修理前



36 矧ぎ目や損傷部分に木屎漆を充填



33 彩色除去



37 欠失箇所を新補



34 彩色除去後



41 背面の彩色・下地除去



38 彩色除去



42 彩色除去後の下半身



39 彩色除去



43 彩色除去後の右足



40 背面の彩色除去作業風景



47 取り外した右裙先



44 矧ぎ目に沿って解体



48 取り外した裙裾部分



45 体幹部の首柄穴の状況



49 体幹部を構成する中間材



46 側面材を取り外した体幹部



53 材の間に木屎漆を充填



50 解体された各部材の補修作業風景



54 矧ぎ目の間に木屎漆を充填



51 体幹部前面材に木屎漆で補修



55 鋸(かすがい)を外した箇所に埋木をし、木屎漆を充填



52 内剥面に埋木をし、木屎漆を充填



59 右足ふくらはぎを新補



56 背面部材の矧ぎ目



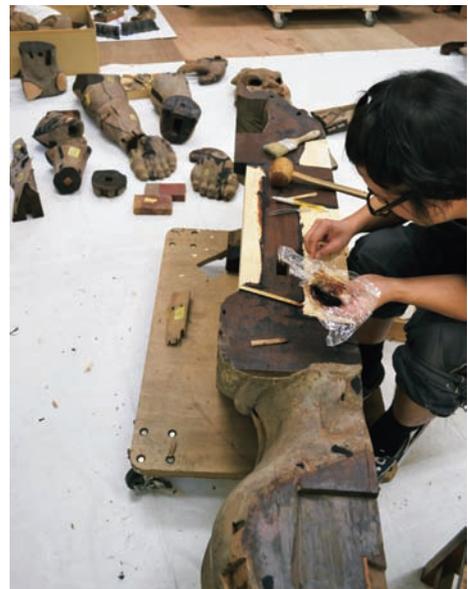
60 左足踵の一部分を新補



57 各々の部材の補修



61 左足先の損傷部分に木屎漆を充填



58 補強材の周辺に木屎漆を充填



65 新補した足柄



62 体幹部の補強



66 切断された足の補修



63 右足柄を受ける体幹部補強材



67 右足の仮組み



64 新補した右足の柄

## 組み上げ—全身・部分



71 体幹部の補強材



68 各部材は麦漆で接合し、鉄鎚で緊結



72 左足首を接合し、木屎漆を充填



69 調整のため切断箇所に入れたマチ材



74 全ての部材を仮接合



73 背面の仮接合



70 立ち位置の確認

## 仕上一部分



78 頭部・面部に弁柄漆を塗布



75 錆漆を塗った頭部



79 桧材にて足柄を新補



76 下地として錆漆を塗った背面



80 足先の取付



77 錆漆の上に弁柄漆を塗布した肉身体部

## 仕上—全身



84 肉身部は弁柄漆を2回塗布



81 首柄穴へマチ材を入れる



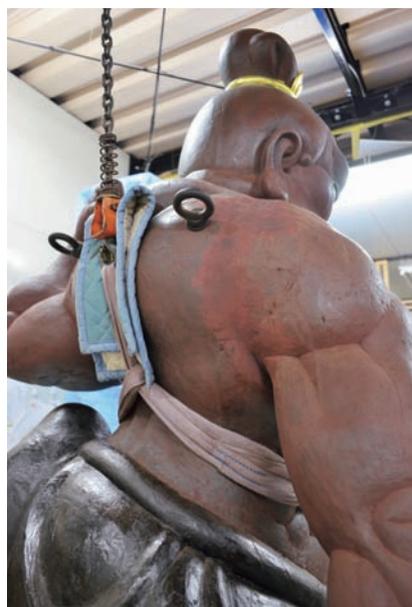
85 背面の様子



82 腕を接合し、鋸で補強



86 全身の仕上が完了



83 背中に吊環を取り付ける



89 修理前 背面



87 修理前 正面



90 修理前 右側面



88 修理前 左側面

修理前 部分



94 頭部を体幹部より取り外した状況



91 開梱直後の状況



95 首柄穴の状況



92 左肘彩色の剥落



96 両足と裙裾裏側の状況



93 両足先の損傷と部材の脱落



100 頭部損傷部からみる玉眼の嵌入状況



97 面部の損傷状況



101 面部と玉眼の損傷



98 頭部を体幹部より取り外す準備風景



102 体幹部より取り外された頭部



99 頭部を体幹部より取り外す



107 玉眼の嵌入作業風景



103 頭部を抜いた直接の首柄穴



108 新たに水晶製の玉眼を嵌入



104 頭部の解体



109 頭部の内削りと納入品



105 玉眼周辺の後補材を取り除く



110 修理銘札を頭部へ再納入



106 修理中の阿形像吽形像の面部

右腕



115 取り外された腕

左腕



111 取り外された腕



116 全解体



112 全解体



117 右手・右腕 釘穴には木屎漆を充填



113 左手 甲の部分に見られる小材が翹げ付けられた跡



118 錆漆を施し、弁柄漆を塗布



114 錆漆を施し、弁柄漆を塗布



122 欠損部分を新補



119 修理前



123 矧ぎ目や損傷部分に木屎漆を充填



120 彩色除去



124 欠失箇所を新補



121 彩色除去後



128 裙の彩色除去作業風景



125 彩色除去



129 彩色除去により損傷箇所が現れる



126 彩色除去



130 像底から見た裙の矧ぎ目の様子



127 彩色除去



135 取り離れた直後の中間材  
くさびが見える



134 前面材



131 側面材を取り外した体幹部



136 体幹部を構成する中間材



132 肩の矧ぎ目の蟻柄穴



137 部材ごとに解体



138 釘抜き作業



133 左体側部分の取り離し



142 木屎漆を充填し、さらに鋸で補強



139 干割れの補修と体側材の位置を確認



143 前面材の間に木屎漆を充填



140 背面材に木屎漆で補修



144 樹脂木屎（エポキシ系樹脂）で接合



141 内剥面に木屎漆を充填



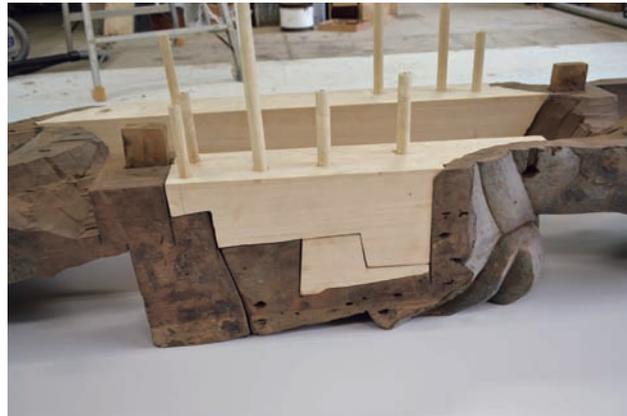
148 補強材の周辺に木屎漆を充填



145 本体と補強材には「ダボホゾ」を設け接合



149 木屎漆の充填作業風景



146 左側面から見た補強材



151 左体側部分の新補



150 左足第5指から甲にか  
け新補



147 余分な「ダボホゾ」を切断



155 体幹部前面材と中間材を接合



152 体幹部の補強



156 両足の矧ぎ付け準備作業風景



153 各部材を繋ぐ補強材



157 切断された右足首の矧ぎ付け



154 体幹部左体側から見た状況

## 組み上げ—全身・部分



161 裙の接合



158 両足の矧ぎ付け後



162 新補材の矧ぎ付



159 背面から見た体幹部の補強材



163 両腕の仮組みによる位置の確認



160 体幹部の補強



167 足先の取付



164 下地として錆漆を塗布



168 調整のため首柄穴にマチ材を入れる



165 像全体に塗布された錆漆



169 首柄の間隙に木屎漆を充填



166 肉身には弁柄漆を塗布

## 仕上—全身



173 完了間近



170 裙には漆で錆固め



174 天衣の位置を確認



171 両腕の接合を残し仕上げに近づく



175 正面から天衣の位置を確認



172 両足先地付面の調整

全 解 体

阿  
形  
像



表



裏

全 解 体

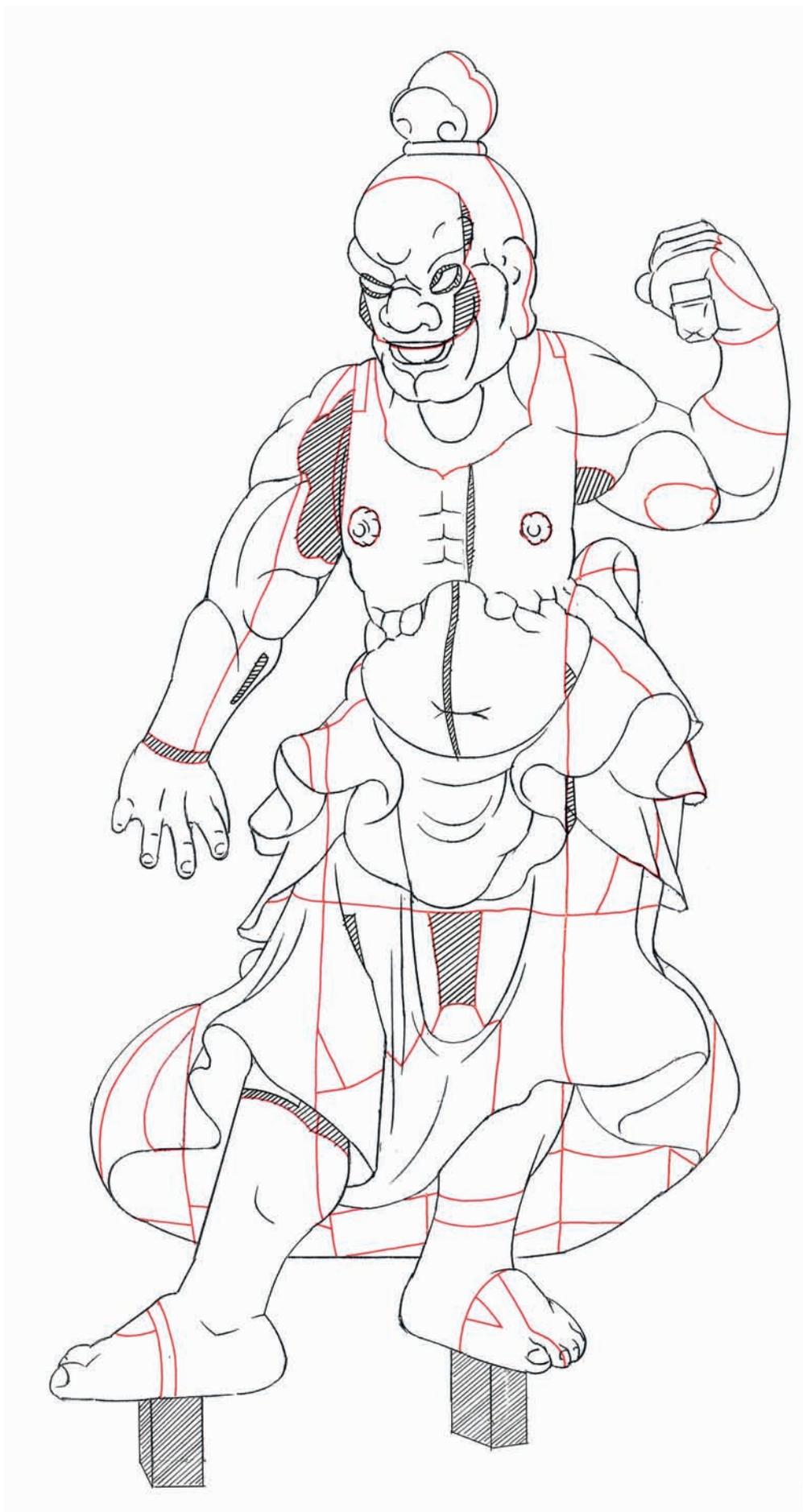
卍形像



表



裏

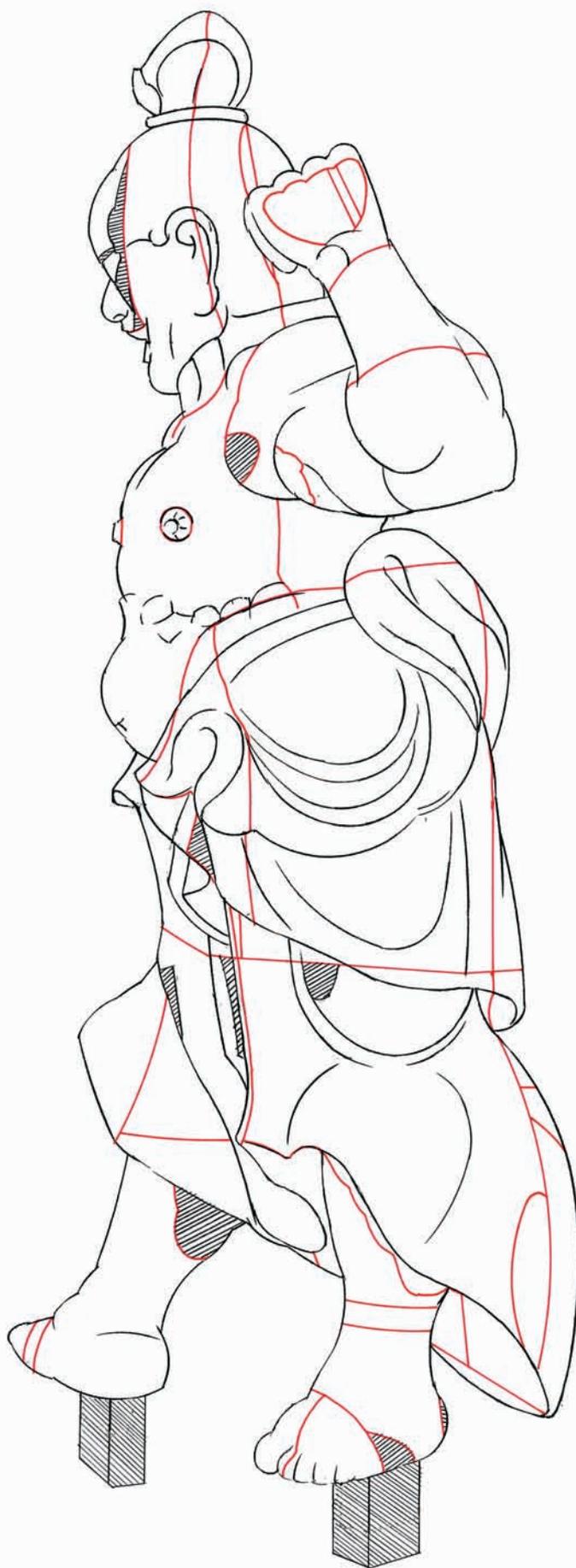


— …… 矧ぎ目  
▨ …… 新補

阿形像 正面 矧ぎ目+新補



阿形像 背面 矧ぎ目+新補



阿形像 左側面 矧ぎ目+新補

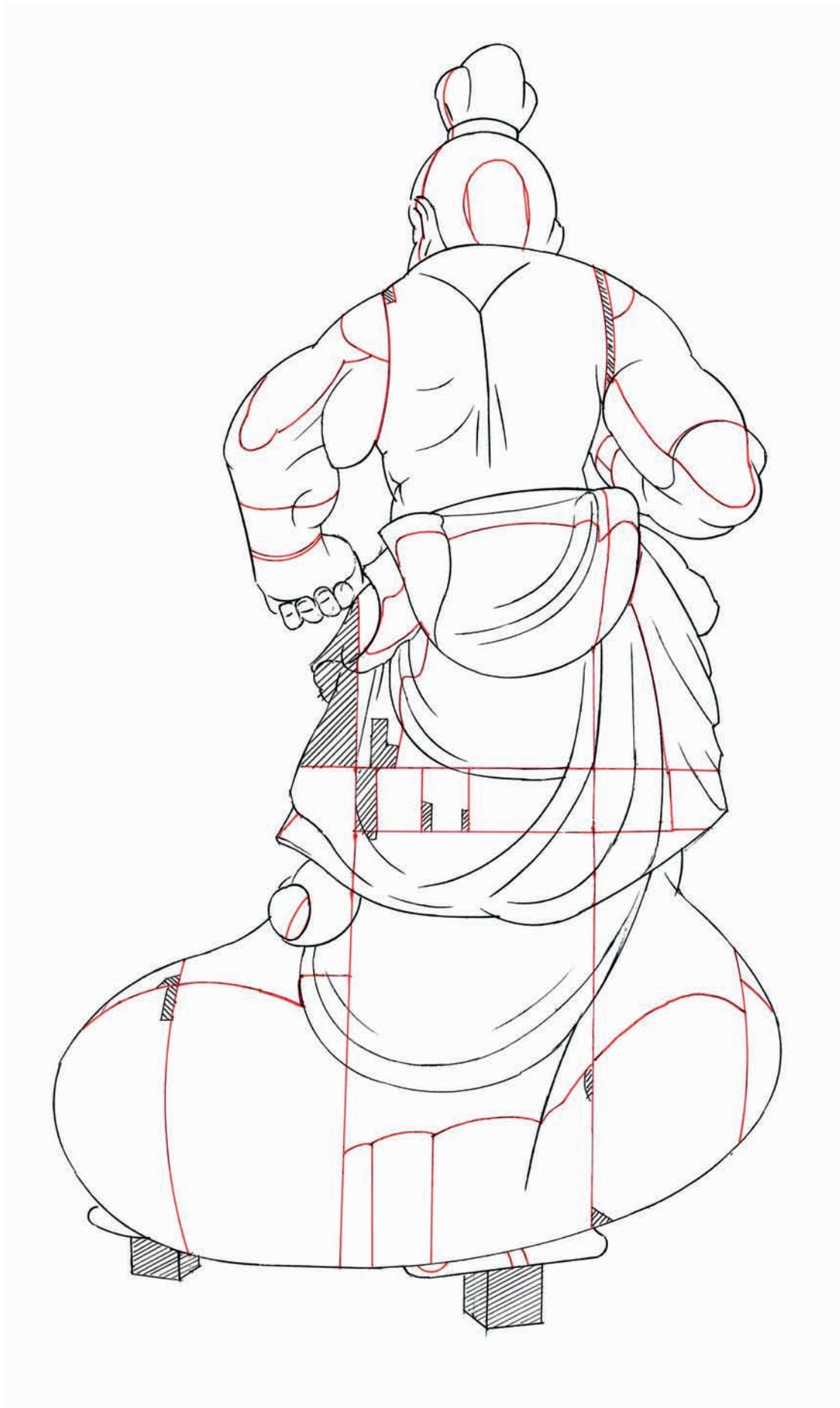


阿形像 右側面 矧ぎ目+新補

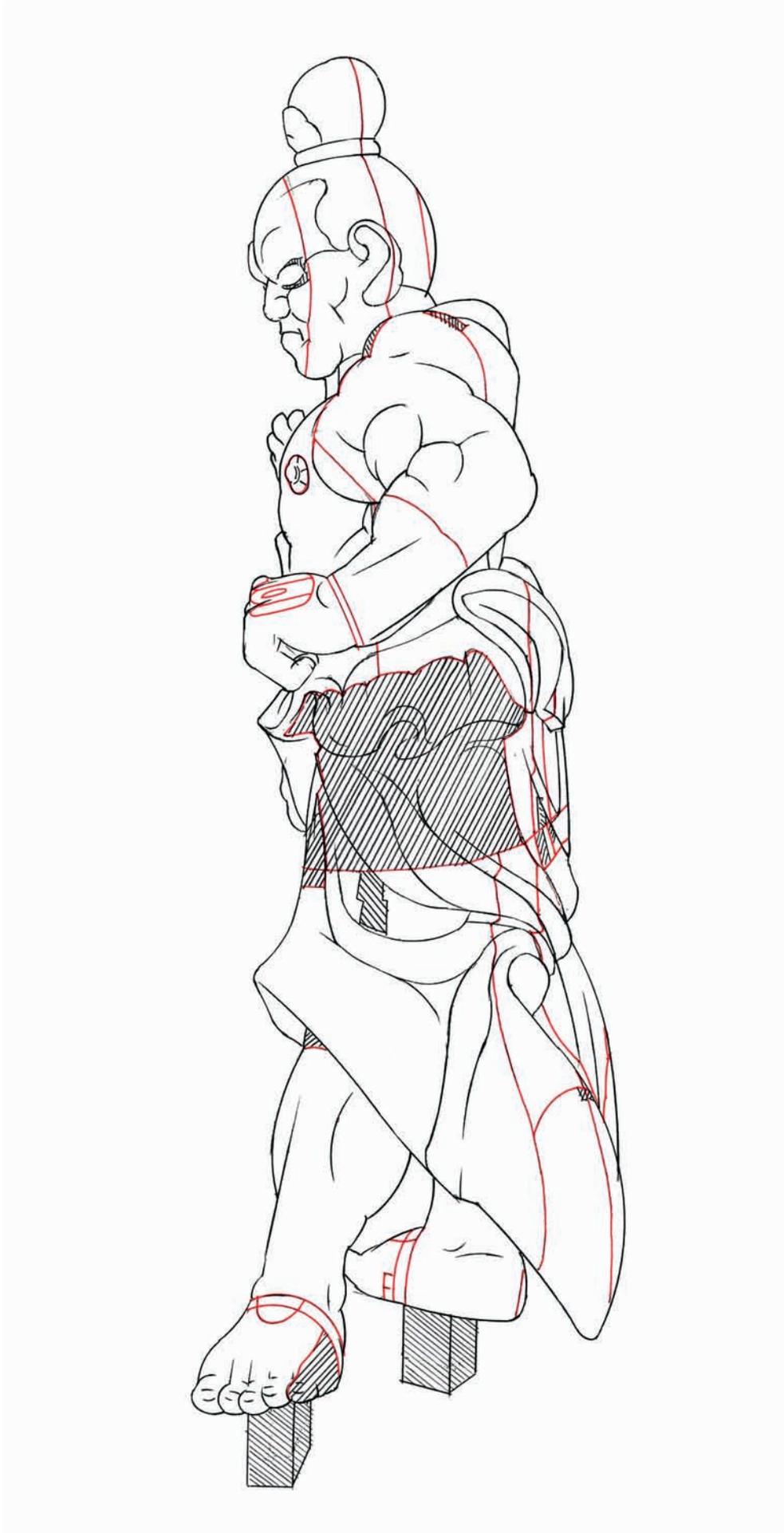


— ……矧ぎ目  
▨ ……新補

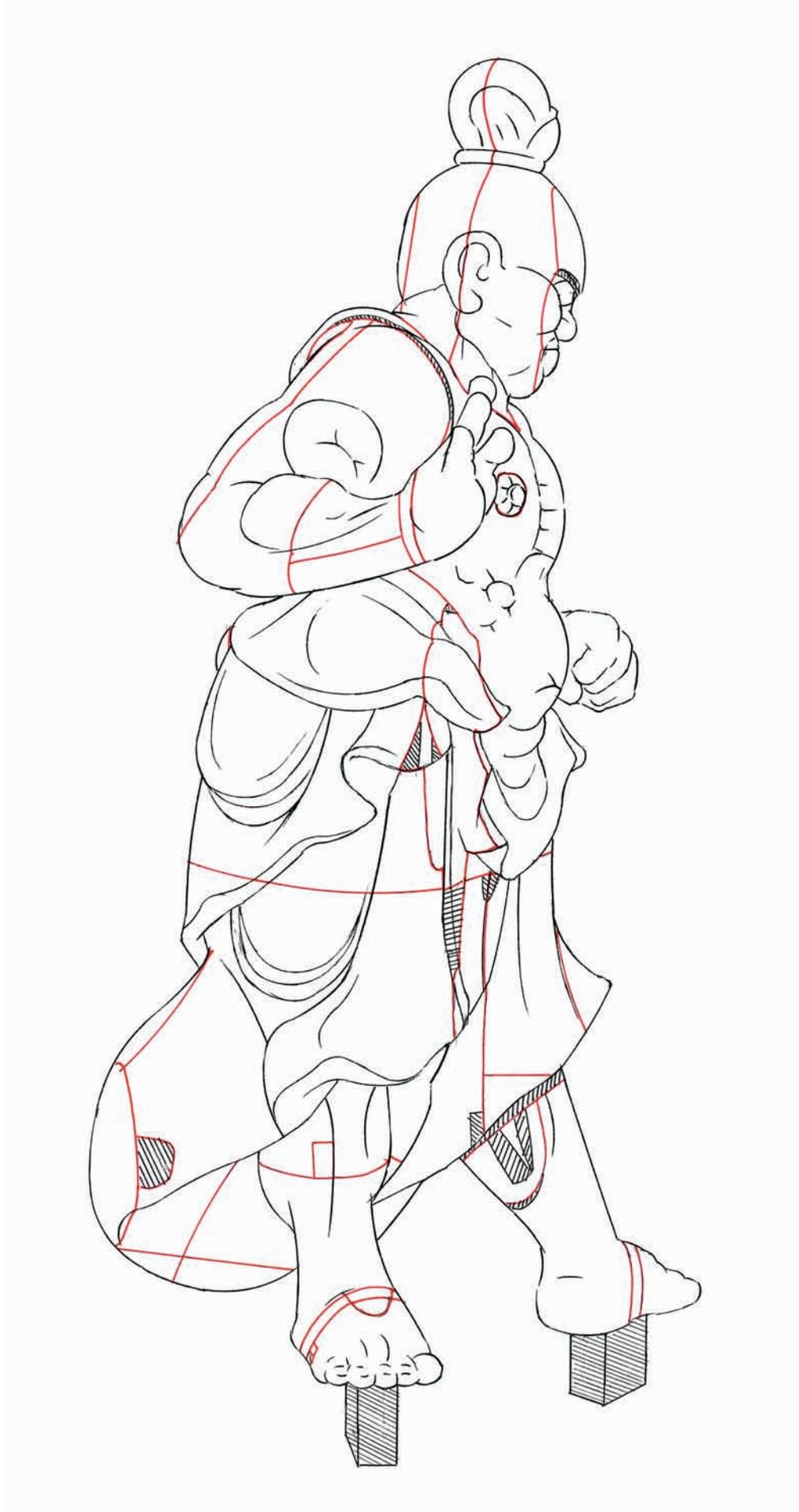
吽形像 正面 矧ぎ目+新補



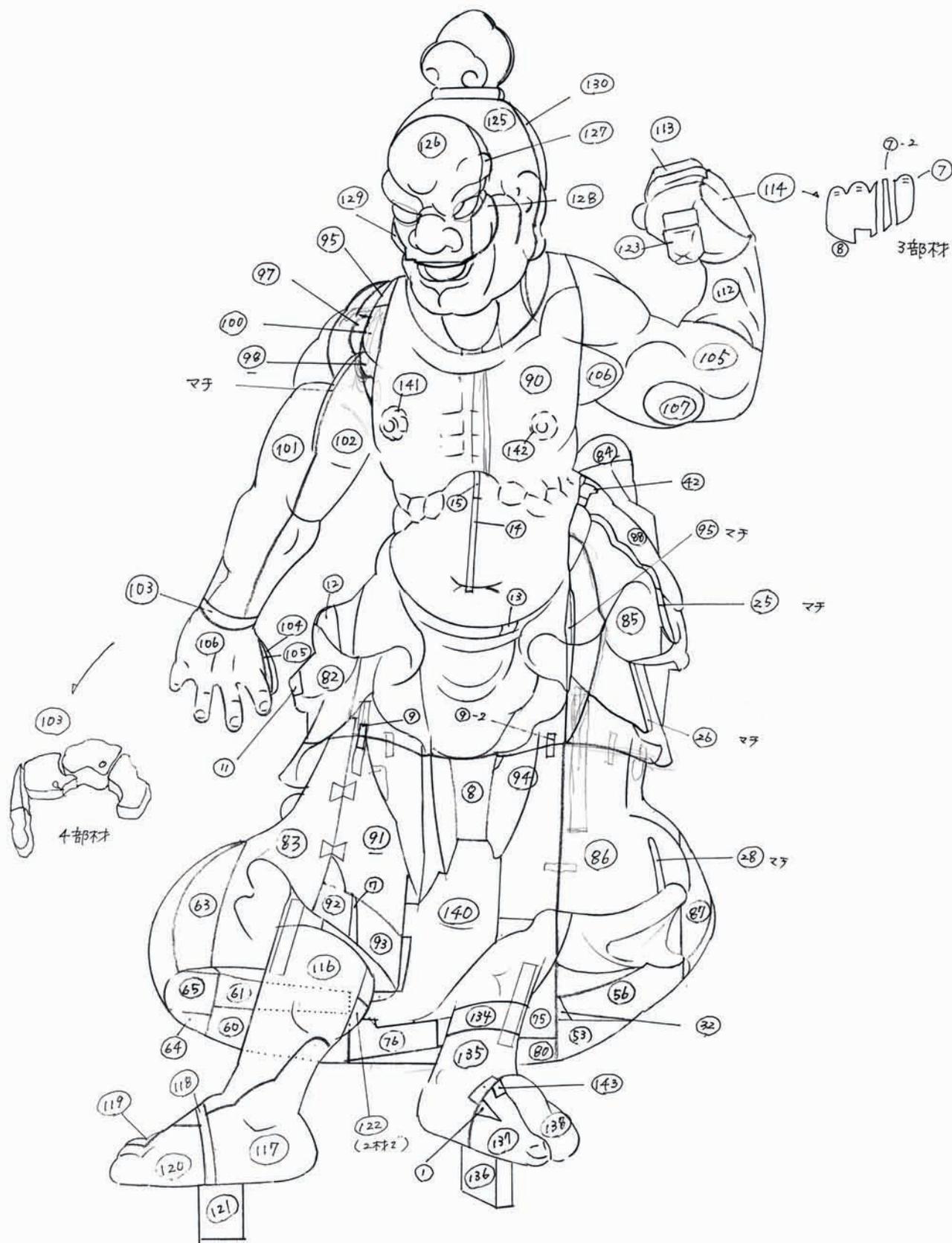
吽形像 背面 矧ぎ目+新補



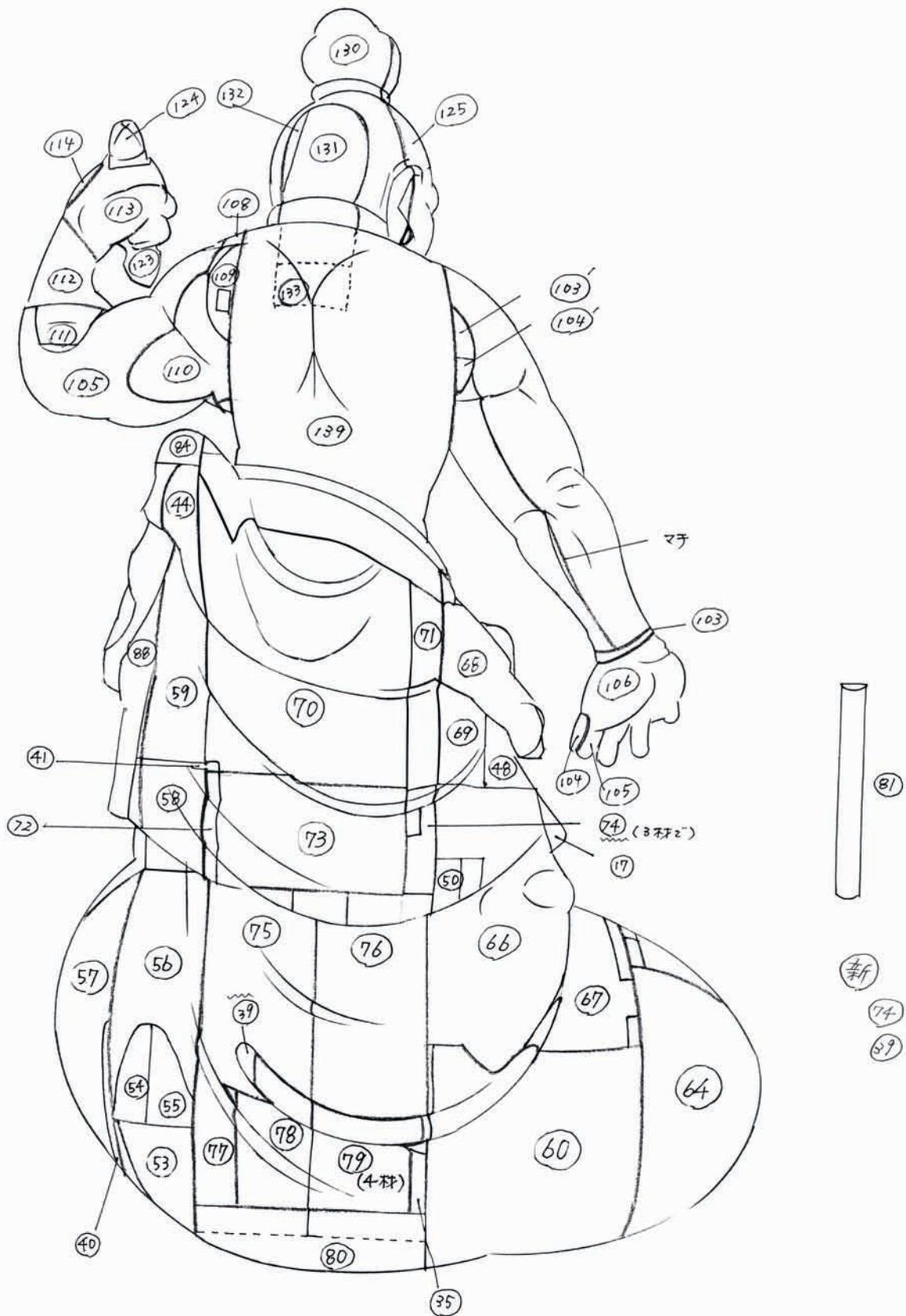
吽形像 左側面 矧ぎ目+新補



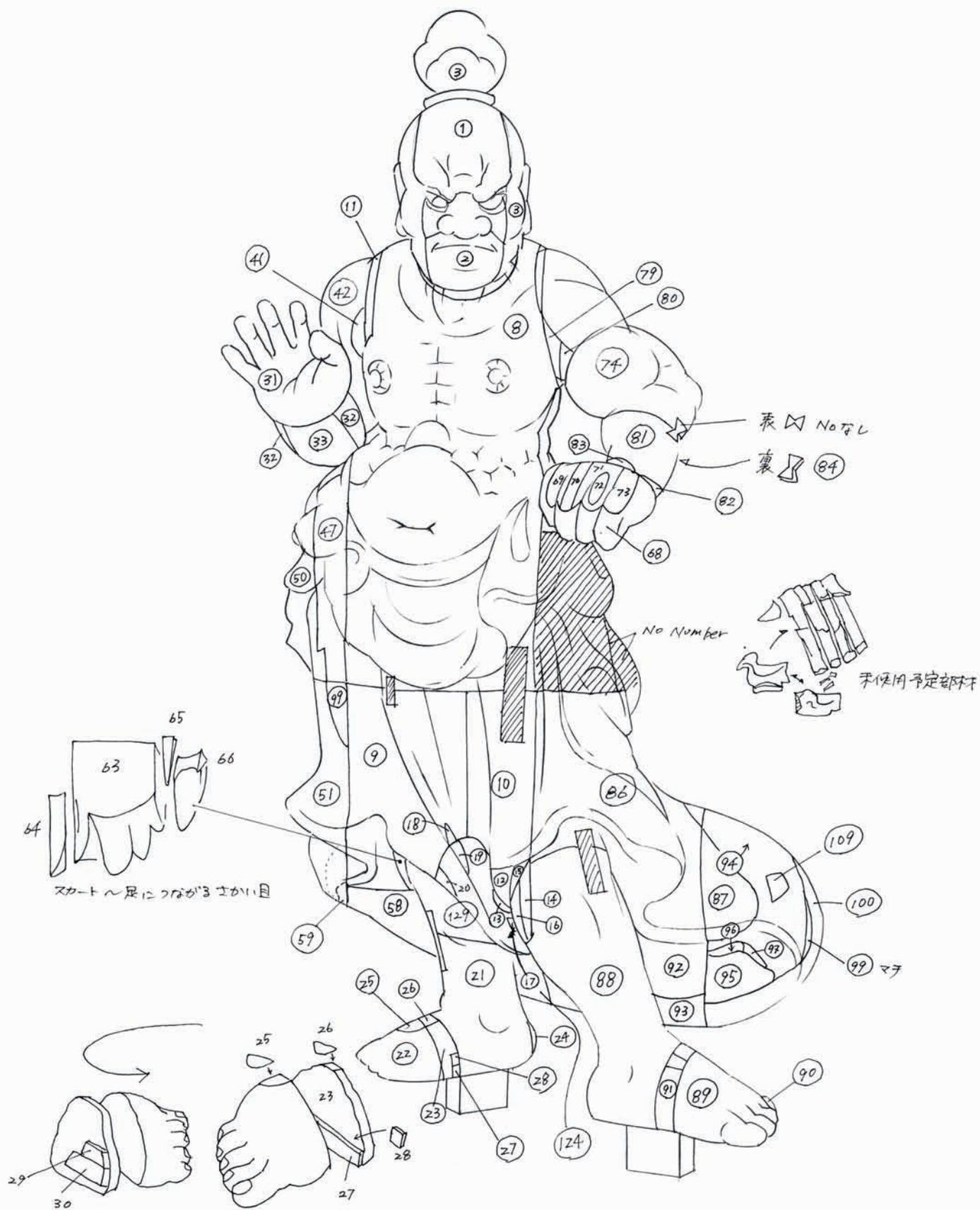
吽形像 右側面 矧ぎ目+新補



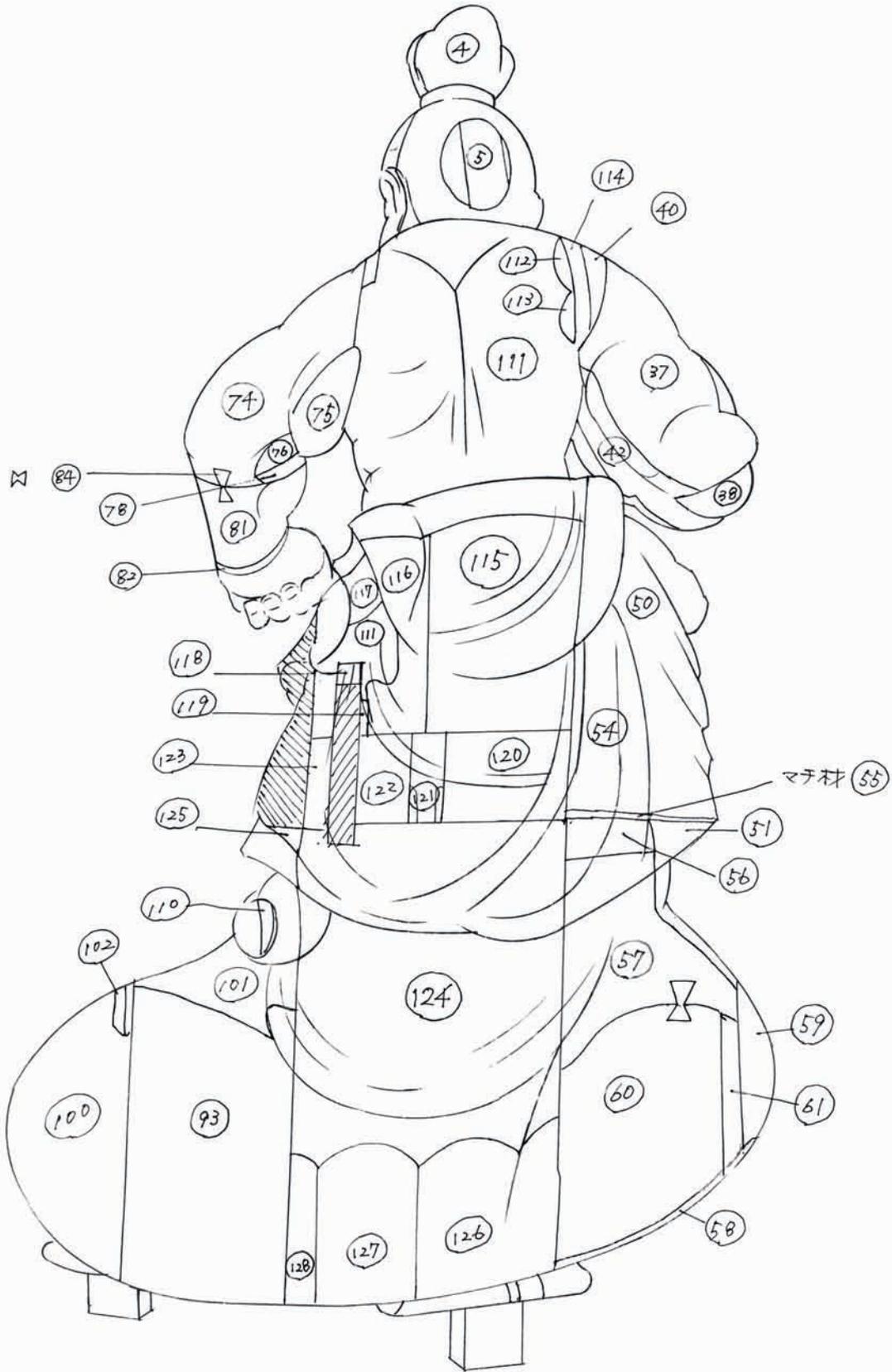
阿形像 正面 材別図



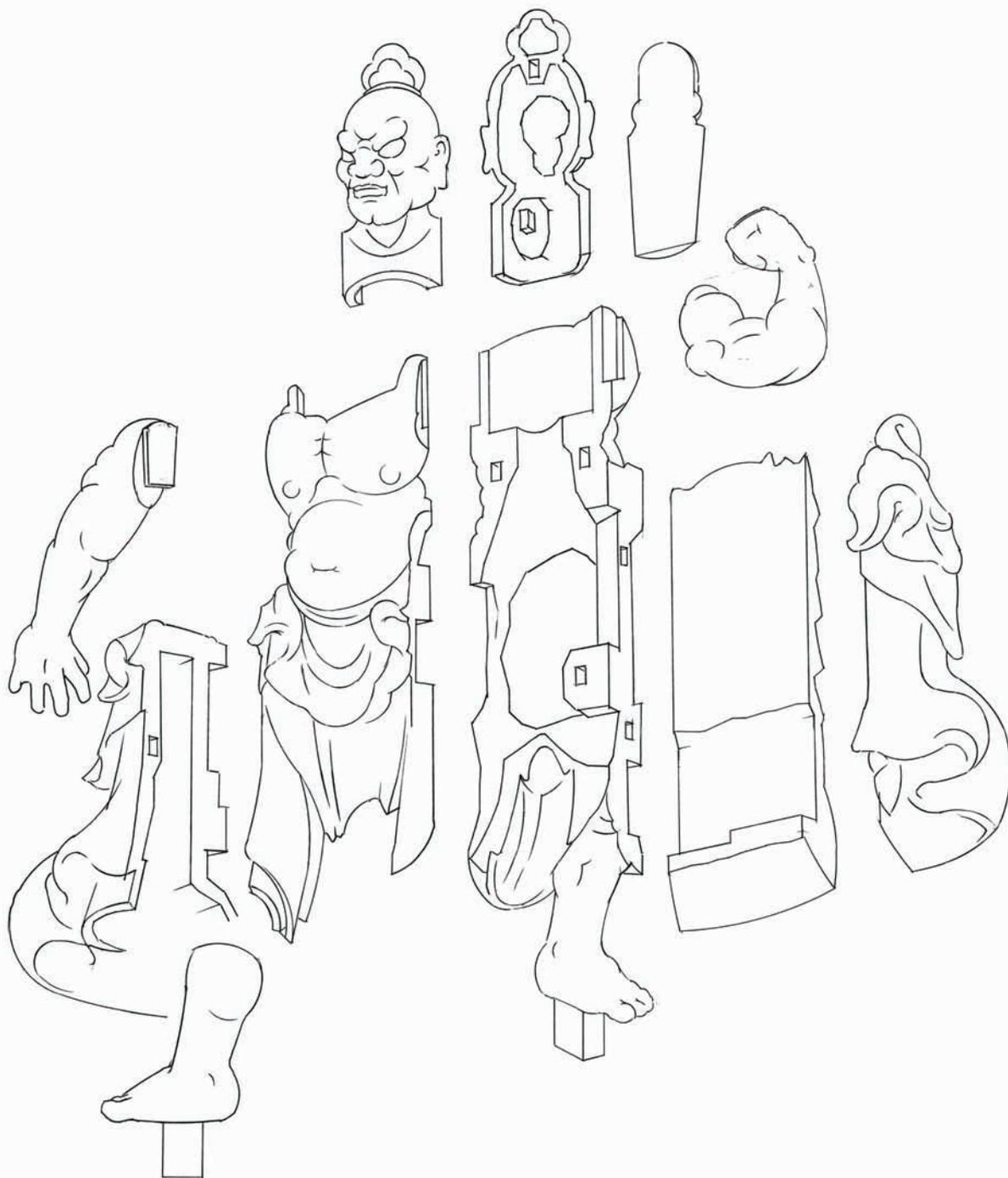
阿形像 背面 材別図



咩形像 正面 材別図



吽形像 背面 材別図



阿形像 主な構造図



吽形像 主な構造図

# 修理前の状況と修理の概要

(有)光圓美術研究所 瀧本光國

## (1) 形状

### 阿形像本体

三山髻を結び、髻紐を結ぶ。顔を右方に向ける。目は見開く(瞋目)。口は開き上半身は裸形。下半身は裙を着け腰紐を巻く。左腕は体側に振り上げ肘を曲げ(屈臂)、頭部横で掌を内側に五指を握り金剛杵を執る。右腕は体側外に垂下し掌を下に指先を前に向け五指を伸ばす。腰はやや左方にひねり裙裾を右方になびかせ、右足を踏み出して立つ。頭部後方に天衣を翻し、両体側にその端を垂下する。

### 吽形像本体

三山髻を結び、髻紐を結ぶ。顔を左方に向ける。目は見開く(瞋目)。口は閉じる。上半身は裸形。下半身は裙を着け腰紐を巻く。左腕は体側に肘を曲げ(屈臂)、腹前で掌を下に向け五指を握り金剛杵を執る。右腕は体側に肘を曲げ(屈臂)、胸横で掌を前に向け五指を開く。腰はやや右方にひねり裙裾を左方になびかせ、左足を踏み出して立つ。頭部後方に天衣を翻し、両体側にその端を垂下する。

### 台座(両像共通)

框座。

## (2) 造像技法

### 阿形像本体

桂材。寄木造り。玉眼(ガラス製)。修理前は布貼りに泥下地塗り、肉身部は朱漆、髻、地髪、眉は黒彩色塗り、裙は群青彩色を施し表面には金泥と墨で輪玉、裙裾周辺には雲を金泥にて施す。天衣は布貼り泥地に彩色仕上げ。頭、体、右足膝頭に内割りを施す。

頭部は髻と共に前後に二材を矧ぎ付ける。前面材と後部材は髻頂部分から耳後半を通る位置で矧ぎ付ける。後頭部は首柄を含む上下二材の別材を矧ぎ付け、首柄で体部に挿し込む。さらに面部は額から上唇までを割り離し、口腔内を彫出し矧ぎ付ける。

体幹部材は前後に三材を矧ぎ付け、前面材は両肩前半を通り、左軸足膝頭にかかる裙裾部分に至るまでの線を矧ぎ目とし、左右大腿部の一部を彫出する。中間材は両肩、背中、左足(足先を除く)、右膝の一部を含む材からなる。後部材は上下二材、その上部材は左右二材、その下部材は六材を矧ぎ付け、腰から裙裾に至る部分を彫り出す。

左体側部は腰帶上部から左大腿部、裙裾を含む材からなる。尚、後方に裙裾の翻り部分を構成する大小数材を矧ぎ付ける。

右体側部は腰帶下から大腿部の一部を彫出。さらに、大きく翻った裙裾を造る材を後方及び側面に矧ぎ付ける。

左右共に乳輪と乳首の下部は同材で彫出し胸部に矧ぎ付ける。乳首

の先端のみ別材を寄せる。

両腕は肩より別材による蟻柄で矧ぎ付ける。

右腕は肘を含む上膊部、前膊部を左右二材、手首に一材を挟み、手先を矧ぎ付ける。親指上面に小材を矧ぐ。

左腕は肘を含む上膊、前膊、手先と甲の一部の四材を矧ぎ付ける。

左足（軸足）は足先部分を除いて体幹部の中間材より彫出。足先は左右に矧ぎ付けられた二材からなる。

右足は膝頭より下から足先を除く踵に至る部分を別材で造り体幹部へ矧ぎ付ける。足先は左右二材と甲に小材（後補）を寄せ彫出。さらに厚さ約2cmの薄材を挟み足と接合。

足柄は左右それぞれ別材を足裏に柄差しとしている。

天衣は概ね二十材ほどの材を矧ぎ付け形造られる。左右の垂下部分は大きく前後に矧ぎ目が認められ、その前面材は数材に、先端に小材を矧ぎ付ける。

### 卍形像本体

桂材。寄木造り。玉眼（ガラス製）。修理前は布貼りに泥下地塗り、肉身部は朱漆、髻、地髪、眉は黒彩色塗り、裙は群青彩色を施し表面には金泥と墨で輪宝、裙裾周辺には雲を金泥にて施す。天衣は布貼り泥地に彩色仕上げ。頭、体、左足大腿部から脹脛にかけ内割りを施す。

頭部は髻と共に前後に二材を矧ぎ付ける。前面材と後部材は髻頂部分から耳後半を通る位置で矧ぎ付ける。後頭部は別材を矧ぎ付ける。首柄部分も上下二材の別材を矧ぎ付け、体部に挿し込む。さらに面部は額から顎までを割り離す。

体幹部材は前後に三材を矧ぎ付け、前面材は両肩前半を通り、右軸足膝頭にかかる裙裾部分に至るまでの線を矧ぎ目とし、左右大腿部の

一部を彫出する。中間材は両肩、背中、右足（足先を除く）、左脹脛の一部分を含む材からなる。後部材は上下二材、その上部材は大小数材（六材）で、その下部材も数材（四材）を矧ぎ付け、腰から裙裾に至る部分を彫り出す。

左体側部は腰帶上部から左大腿部から足首、裙裾を含む材からなる。さらに大きく翻った裙裾を造る材を後方及び側面に矧ぎ付ける。

右体側部は腰帶から大腿部の一部を彫出。また、後方に裙裾の翻り部分を構成する大小数材を矧ぎ付ける。

左右の乳輪と乳首の下部は同材で彫出し胸部に矧ぎ付ける。

両腕は肩より別材による蟻柄で矧ぎ付ける。

右腕は肘を含む上膊部を前後上下四材、前膊部は上下二材、手首に一材を挟み、手先を矧ぎ付ける。

左腕は肘を含む上膊、前膊、手先と甲の一部の四材を矧ぎ付ける。ただし上膊部と手先の甲の一部に小材を矧ぎ付ける。

右足（軸足）は足先部分を除いて体幹部の中間材より彫出。足先は別材を矧ぎ付ける。

左足は大腿部から足先を除く踵に至る部分を別材で造り体幹部へ矧ぎ付ける。足先は左右二材を寄せ彫出。さらに薄材を挟み足と接合する。

足柄は左右それぞれ別材を足裏に柄差しとする。

天衣は概ね十数片の材を矧ぎ付け形造られる。左右の垂下部分は大きく前後に矧ぎ目が認められ、その前面材の先端に小材を矧ぎ付ける。

### 台座（両像共通）

松材による寄木造。正面に格狭間を形造る。

### (3) 修理前の状況

今回の仁王像修理では、事前調査の段階で確認できなかったことが施工を進める中で判明し、その結果、部材の補強方法など構造面での工夫を余儀なくされたことや、また当初の修理方針を検討のうえ修正することもしばしばあった。更に、安置される環境においては、仁王門内とはいえ風雨にさらされ気候の変化も直接受けるなど想像以上に厳しいものであることも再認識させられた。

以下、今回の修理に於ける、仁王門での安置の様子や修理前の状況を述べることにする。

修理の実施に先立ち現状を調査した。仁王門では金剛柵上部に張られた金網を通して見ても、阿形像・吽形像ともに、表面の彩色は既に浮き上がり剥落も激しく、台座周辺には脱落した天衣の一部や本体部材の一部と考えられる木片が散乱していた。また、その彩色の剥落によって素地の露出した箇所では大きな干割れや部材の矧ぎ目に隙間が見られるなど、像全体に及ぶ矧ぎ目の緩みが推測できた。特に重量のかかる膝周辺の不自然な損傷や、足先などの矧ぎ目に亀裂が見られることから両像がかるうじて立ち姿を維持していることは明らかであると思われる。

その後、開かれた修理検討会にてこれらの知見を報告、全解体修理の方針が決定した。修理に当たりまず問題となったのは作業所である。修理には、阿・吽二体の像を同時に収納し、作業、調査、記録ができるだけの広さが必要となる。

幸い、境内裏手に二間（三・六m）の高さと三間×五間（五・四×九・

〇m）の広さの修理所を設けることができた。そして作業所建設と並行して、修理前の記録として3D映像とスチール写真の両撮影のための機材や手順と方法などが検討された。

そうした事前準備を経て平成二十三年十月七日、仁王像搬出がおこなわれた。像の損傷状態は想像以上に激しいものであった。仁王像が安置される空間は約一八〇cm四方。頭上からチェーンブロックをかける。吊り上げる。移動によって背面材を含む部材の脱落の危険性も考えられる。また、搬出の困難さを考えて両腕を取り離すことも検討したが修理前の状況を記録する為にもできる限り現状での作業所への移動を優先した。緩んだ部材も含め像全体を養生し、全体を包み込むように梱包、修理所への移動が行われた。そして、まず3D撮影、つづいてスチール写真の撮影が行われた。



修理所内でのスチール撮影風景

#### (4) 損傷状況

##### 阿形像本体

- 1) 全体に亘り各矧ぎ目が緩み像全体に大きな損傷が認められた。
- 2) さらに、天衣の一部や左体側腰紐部分、背面臀部位置の部材、左足先の各部材は既に脱落していた。
- 3) 全身に塗られた彩色（肉身部は朱塗り、髻、地髪、眉は黒色、裙の群青）は下地より浮き上がり、剥離、剥落が著しく素地の露出も見られた。
- 4) 全体に亘り各所に打ち込まれた鉄釘、鉄鏝、鉄板等が腐食し浮き上がり、また抜け落ちていた。さらに錆によって周辺の木質を脆弱にしていた。
- 5) 髻紐は欠失していた。
- 6) 右目は固定されているが左玉眼は内割りされた頭内部に脱落し、白目の箇所縦に亀裂、その他二箇所欠損が見られた。また、両目は眼球と瞼の間に隙間があるためか粘土状の物質で整形されていた（後日、解体により粘土状の下層にさらに漆木屎による整形も確認された）。
- 7) 首柄が挿し込まれる体部柄穴の背面の部材が矧ぎ目より脱落していた。
- 8) 首柄と柄穴との間のマチ材のうち、背面側の数片が脱落し、緩みが認められた。
- 9) 左乳首（先端は後補）は脱落、右乳首は先端が矧ぎ目より脱落し



阿形像：頭体部と天衣の損傷状況



阿形像：左腹部と腰部の損傷状況

- 10) 右手第一指の外側の一部が矧ぎ目より脱落していた。
- 11) 右足膝下部切断の矧ぎ目が緩み、周辺の材は鉄鏝などの影響も加わってか、亀裂、損傷が著しかった。
- 12) 左足先が脱落。その足先は第二指中央の矧ぎ目より遊離していた。
- 13) 裙裾を形成する部材のほぼ全てが緩み、背面の比較的大きな部材（五片）が脱落し、内割りの様子を見取ることができている状態であった。
- 14) 左足は踵地付きより二八cmと三三cmの位置で横に切断され带状の鉄板（二四・五×三・〇cm）、（二五・〇×三・三cm）と鏝で結合されていたが、緩みが激しく像の立ちが不安定であった。

15) 左右の足柄が小さく、柄の挿し込みも浅いことから像の立ちは極めて不安定であった。現状では像の自立は不可能であった。

16) 足先周辺に虫蝕穴や朽損が認められた。

17) 天衣は左先端のみかろうじて裾裾に取り付けられていたが、他の部分は五十七個の木片となって脱落し、その部材の多くは経年のためであろうか摩耗、朽損等が激しく脆弱であった。

18) 虫蝕については、背面中央にその痕跡が確認されたが像全体としては僅かであった。



阿形像:膝下から足柄までの損傷状況



阿形像:足先周辺の損傷状況

#### 吽形像本体

1) 全体に亘り各矧ぎ目が緩み一部は遊離し像全体に大きな損傷が認められた。

2) 天衣や部材の一部は脱落していた。

3) 全身に塗られた彩色(肉身部は朱塗り、髻、地髪、眉は黒色、裙の群青)は下地より浮き上がり、剥離、剥落が著しく素地の露出も見られた。

4) 全体に亘り各所に打ち込まれた鉄釘、鉄鏝、鉄板等が腐食し浮き上がり、また抜け落ちていた。さらに錆によって周辺の木質を脆弱にしていた。

5) 髻紐は欠失していた。

6) 前面材に於いて、割り離した面部材のうち、眼窩を形造っている上瞼を含む上部が割損し脱落していた。

7) 右玉眼は固定されているものの通例の当木は施されておらず、玉眼裏に当てた綿を挟んで棒状の一本の木材によって内側から支え、固定されていた。

8) 左玉眼は脱落寸前の状態であったため調査の際、頭部より取り離した。

9) 両眼窩部分の破損は激しく、眉間を含む周辺を粘土状の物質で整形していた。

10) 首柄と柄穴との間のマチ材のうち、左側の数片が脱落し、緩みが認められた。

11) 左乳首は脱落していた。右乳首も脱落寸前であった。

- 12) 右肩の矧ぎ目及び腕を構成する部材の矧ぎ目が全て緩んでいた。
- 13) 左肩の矧ぎ目及び腕を構成する部材の矧ぎ目が全て緩んでおり、特に肘の矧ぎ目は大きく遊離、脱落寸前であった。
- 14) 左足膝下部切断の矧ぎ目が緩み、周辺の材は鉄錆などの影響も加わってか、亀裂、損傷が著しかった。
- 15) 左足先の矧ぎ目が遊離し、足先が緩んでいた。
- 16) 切断された右足脛部分の接続に用いられた鉄板、錠が腐食し浮き上がっていた。
- 17) 裙裾を形成する部材のほぼすべてが緩み、脱落の危険性が見てとれた。
- 18) 左右の足柄が小さく、柄の挿し込みも浅いことから像の立ちは極めて不安定であった。現状では像の自立は不可能であった。
- 19) 足先周辺に虫蝕穴や朽損が認められた。
- 20) 天衣は矧ぎ目のほぼすべてが遊離し、約二十七個の木片となって脱落していた。また部材の多くは経年のためであろうか摩耗、朽損等が激しく脆弱であった。

#### 台座（両像共通）

- 1) 彩色や形状が必ずしも像容に適合しているとはいいがたい。
- 2) 天板が薄いため台座内で足柄に遊びがあり、像の立ちが不安定であった。



咩形像：頭部と上半身の損傷状況



咩形像：全体に亘り矧ぎ目がゆるみ、大きく損傷している。



咩形像：木片となってしまった天衣



咩形像：左右足柄の状態

## (5) 修理

### 阿形像本体

- 1) 表面の彩色を除去し、脱落した部材を整理した。
- 2) 燻蒸殺虫・殺卵・殺カビ（酸化プロピレン＋アルゴン）を行った。
- 3) 一旦、主要な部材間（頭部と体幹部、体幹部と体側部、体幹部と腕）の各矧ぎ目を取り離し清掃した。
- 4) さらに、各部材の矧ぎ目をすべて取り離し、腐蝕した鉄釘・鏝・鉄プレートをすべて除去した後、汚れを落とす。
- 5) 矧ぎ目の各所に見られる木屎漆や後補の埋木等はすべて除去した。
- 6) 材質が脆弱化していた箇所はパラロイドB72の10～30%溶液を含浸させ素地の強化を図った。
- 7) 像全体に及んだ鉄釘・鉄鏝の除去後の穴や小さな干割れは木屎漆を充填、大きな干割れ箇所は桂材で埋木をし形状を整えた。
- 8) ガラス製両玉眼と周辺との隙間は後補による粘土状の物質で充填、整形されていたが、これらをすべて除去し新たに水晶製の玉眼を嵌入した。さらに後補の当木等の固定処置が不適切であることから当木、真綿も新補し竹釘で固定した。欠損が見られた脛周辺は木屎漆で形状を整えた。
- 9) 彫刻面に於ける欠失箇所はすべて桂材にて新補したが各所に見られた不規則な小欠損等は必要に応じて人工木材（エポキシ樹脂系接着剤とフェノール樹脂マイクロバルーン）を用いて形状を整えた。
- 10) 両肩の矧ぎ面には腕側に別材で板状の蟻柄が取り付けられ体幹部側の柄穴に挿し込み接続されていたが、経年により緩みが生じており両腕の蟻柄を新補した。
- 11) 上下に分割された胴体部分の接続と補強については、接続面は麦漆及びエポキシ樹脂系接着剤を使用し、除去された鏝痕に新補した打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝を打ち込んだ。さらに内割り内部左右に、上下を繋ぐものとして桧材で柱状の補強材を取り付けた。
- 12) 一旦切り離された両足（右足は膝下、左足は脛）の接続に使用された鏝と帯状鉄板は腐蝕が激しく、すべて除去した。右足は桧材で新たに柄と柄穴を新補し麦漆で接合、打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝で緊結した。左足には既に柄と柄穴が切られていたが、朽損していたため柄は新補した。
- 13) 両足先の柄は新補し、麦漆で接合、打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝で緊結した。
- 14) 天衣はほぼ解体状態であったことや摩耗、朽損が激しく使用に耐えられないものは別保存とした。欠失箇所や小割損箇所は耐久性と変形を考慮し敢えて桧材で補足し形状を整えた。
- 15) 取り離したすべての矧ぎ目は麦漆で接合し、構造上必要と思われる箇所は打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝と釘を打ち込み緊結した。
- 16) すべての矧ぎ目の間隙には木屎漆を充填した。

- 17) 仕上げは下地として素地全体に錆漆を塗布し、漆による錆固めを施した後、肉身部は弁柄漆を塗布。裙はアクリル樹脂メヂウム（商品名リキテックス、ジェルメヂウム、以下商品名は省略する）と青色顔料による塗料を塗布した。
- 18) 髻飾、元結紐、持物はすべて漆下地を施し金箔押しとした。
- 19) 腐蝕が激しい鉄製の環及び掛け金具は除去し、鉄製で防錆処置を施した環、掛け金具を新補した。

### 卍形像本体

- 1) 表面の彩色を除去し、脱落した部材を整理した。
- 2) 燻蒸殺虫・殺卵・殺カビ（酸化プロピレン＋アルゴン）を行った。
- 3) 一旦、主要な部材間（頭部と体幹部、体幹部と体側部、体幹部と腕）の各矧ぎ目を取り離し清掃した。
- 4) さらに、各部材の矧ぎ目をすべて取り離し、腐蝕した鉄釘・鏝・帯状鉄板をすべて除去した後、汚れを落とした。
- 5) 矧ぎ目の各所に見られる木屎漆や後補の埋木等はすべて除去した。
- 6) 材質が脆弱化していた箇所はパラロイドB72の一〇～三〇%溶液を含浸させ素地の強化を図った。
- 7) 像全体に及んだ鉄釘・鉄鏝の除去後の穴や小さな干割れは木屎漆を充填、大きな干割れ箇所は桂材で埋木をし形状を整えた。
- 8) 上下に割損した頭部前面材は玉眼周辺の粘土状の物質を取り除き、上下を麦漆で接続した。

- 9) 大きく欠損した眼窩部分は木屎漆で周囲に合わせ形状を整えた。
- 10) 後補の右玉眼の当木は取り除き真綿、当木、竹釘を新補し通例に習い固定した。その際玉眼との間隙には木屎漆を充填した。事前に取り除いた左玉眼も同様に固定した
- 11) 彫刻面に於ける欠失箇所はすべて桂材にて新補したが各所に見られた不規則な小欠損等は必要に応じて人工木材（エポキシ樹脂系接着剤とフェノール樹脂マイクロバルーン）を用いて形状を整えた。
- 12) 両肩の矧ぎ面には腕側に別材で板状の蟻柄が取り付けられ体幹部側の柄穴に挿し込み接続されていたが、経年により緩みが生じており両腕の蟻柄を新補した。
- 13) 上下に分割された胴体部分の接続と補強については、接続面は麦漆及びエポキシ樹脂系接着剤を使用し、除去された鏝痕に新補した打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝を打ち込んだ。さらに内割り内部の左右に、上下を繋ぐものとして桧材で柱状の補強材を取り付けた。
- 14) 一旦切り離された両足（左足は膝下、右足は脛）の接続に使用された鏝と帯状鉄板は腐蝕が激しく、すべて除去した。その左足部分には体幹材を含む位置で切断されており柄での補強は困難なため、内割り部分を埋木とし、接着面積を広くすることで強度を確保した。麦漆で接合し、表面からは打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鏝で緊結した。右足には既に柄と柄穴が切られていたが、朽損していたため柄は新補した。

15) 両足先の柄は新補し、麦漆で接合、打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鍔で緊結した。

16) 天衣はほぼ解体状態であったことや摩耗、朽損が激しく使用に耐えられないものは別保存とした。欠失箇所や小割損箇所は耐久性と変形を考慮し敢えて桧材で補足し形状を整えた。

17) 取り離れたすべての矧ぎ目は麦漆で接合し、構造上必要と思われる箇所は打ち出しの鉄製で防錆処置（焼き漆）を施した鍔と釘を打ち込み緊結した。

18) すべての矧ぎ目の間隙には木屎漆を充填した。

19) 仕上げは下地として素地全体に錆漆を塗布し、漆による錆固めを施した後、肉身部は弁柄漆を塗布。裙はアクリル樹脂メデュウムと青色顔料による塗料を塗布した。

20) 髻飾、元結紐、持物はすべて漆下地を施し金箔押しとした。

21) 腐蝕が激しい鉄製の環及び掛け金具は除去し、鉄製で防錆処置を施した環、掛け金具を新補した。

### 台座（両像共通）

1) 現状は框座のみであったが形状、色彩が不適切であり、立ちも不安定であった。

2) 両像とも新たに樟材で方座（黒漆塗り）、桧材で框座（樹脂塗料塗り）を新補した。



阿形像：右足膝下切断部分を取り離す



阿形像：除去された木屎漆や埋木



阿形像・吽形像の各部材を仮接合した様子



吽形像：解体修理された部材

## (6) 「修理概要」

阿形像・吽形像共にほぼ同様の構造で作られた寄木造りの仁王像である。用材は良質の桂が使用されている。頭部は阿形像・吽形像共に前後に二材を矧ぎ付け内刳りを施していた。面部は前面材の一部分を割り離し、内刳りを施しガラス製の玉眼を嵌入していた。阿形像の右玉眼は綿を当て細い棒状の木片を当木としており、固定方法は粗雑であった。両像共に左目は修理前すでに脱落しており固定の様子は確認できなかった。

また吽形像の右玉眼も棒状の木を玉眼裏と後頭部裏との間に嵌め込むように固定するという極めて便宜的な方法であった。両像の玉眼は、一個の扁平な球状の吹きガラスを縦に切断し、左右の玉眼としたものであることも解体によって判明した。今回、これらの玉眼はそれぞれ頭部内刳り内部に納め、新たに水晶製玉眼を嵌入した。

頸部首柄部分と体部側の柄穴との間にはかなりの隙間（広い箇所では約2cm）が空いており、通常の柄であればこれほどの隙間を空けて造ることはない。その理由はさておき、施工では幅約5cm程の楔状の材をその隙間に巡らせ、同時に首の位置の調整をおこない接続した。

体幹部は大きく前後に三材を矧ぎ合わせて造られ、前面材、中間材共に幅約四三cm×厚さ二七cmの材から形造られている。裾の背面を形造る後部材は、厚さ約一〇cm程の材を複数矧ぎ合わせた一枚の板状の上に、裾裾の翻り部分として厚さ五cm程の小材を、やはり複数矧ぎ付け内刳りを施している。前面材と中間材、さらに中間材と体側材と、

それぞれの矧ぎ面は、雇い柄で接続と位置決めがされている。

また前面材、中間材は柄部分を彫り残し、大きく内刳りを施している為、それぞれの矧ぎ目の接合面積は僅かである。

そのほか像全体に亘って小材を矧ぎ付け彫刻面を形造っており、全解体によって確認できた部材数は阿形像・吽形像それぞれ約二〇〇個程であった。

今回の仁王像修理で特筆したい事として、両像の腰部分と両足の切断箇所が存在があげられる。

腰部分の切断箇所は地付きから阿形像は九〇cm、吽形像は約九六cmの位置。鋸引き面が上部と下部とで一致していることからその箇所を回し引きしたものと推測される。その際、数回にわたって鋸の方向を引き換えたと思われる痕跡も確認された。その接合方法は鋸と帯状鉄板のみであった。そのうえ内刳りによって接合面積は極めて少なく、その為もあつてか緩みが見られ、構造的には極めて脆弱となっていた。修理では切断された上下を繋ぐことと、体側材との接合面の広さを考慮した補強材を栓で新補した。接合は麦漆、さらにダボ柄によって補強した。これら一連の施工では、現状の体幹部を残して、まず体側部を解体し補修、そのあと体幹部の柄位置に合わせて再び体側材の上下材を接続するなど、通常の「全解体」「補修」「組み上げ」と云った順序と比べ、多くの時間と工夫を必要とした。

切断された時期については、造像前、造像中又は造像後（修理時を含む）のいずれと考えるべきか、修理を行う者として大いに関心を持つところであった。ここではいくつかの推測を交え述べることにする。

まず、造像中または造像後の切断と考えた場合、その根拠のひとつは阿形像前面材の左体側面にある二つの柄穴の一つがこの切断によって分断され、その結果柄穴の役目を呈していないことである（ただし柄穴が造像当初のものであることが前提である）。そのことから推測して切断は少なくとも木組み後の、それも柄の位置が確認できない状況で行われた。すなわち造像途中、もしくは造像後と考えられる。また仮に体幹部を既に切断された材を用いたとした場合、体側材をわざわざ体幹部の切断位置に合わせて短ぎ付ける必要性がどれ程あるだろうか。それに体幹部と体側部の切断面に残る僅かな鋸引きの痕跡などから見ても、やはりこの切断行為が一連のものであり、当初から切断された用材を用いたとは考え難いのである。そのほか両足は、阿・吽ともに軸足は脛の部分、それも阿形像については二箇所、遊足はそれぞれ膝下で切断されていた。その切断された部分についてはいずれも同材であることから朽損による新補または造形上の改変ということは考え難く、疑問が残るところである。

像表面については、部材の短ぎ目及び鏝、带状鉄板の位置周辺に布貼りが確認された。仕上げは当初、素地の古色仕上げも検討されたが、協議の末、彩色仕上げとした。彩色は修理前を踏襲することを基本とし、塗り替えられた仁王門との調和も考慮に入れた仕上げをめざした。素地の木固めと下地を兼ね錆漆を施したあと錆固めを行った。表面は肉身部を弁柄漆とし、裙、天衣はアクリル樹脂メジウムと青色顔料による塗料を塗布した。

今後、使用した塗料、材料等の経過を観察していくことや、切断の

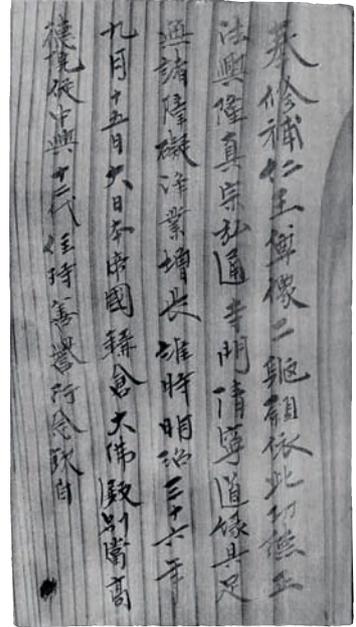


阿形像：新補部分を含めての組み立て

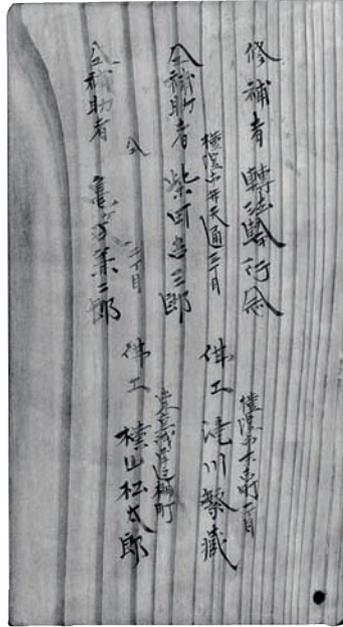
時期と理由についても、これからの課題としなければならない。

(7) 修理銘札

阿形像頭部納入 修理銘札



(表)



(裏)

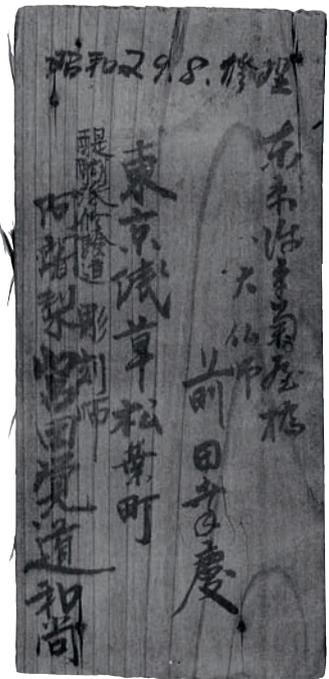
奉修補仁王尊像二軀願依此功德正  
法興隆真宗弘通寺門清寧道縁具足  
無諸障礙淨業增長維時明治三十六年  
九月十五日大日本帝國鎌倉大佛殿別當高  
徳院從中興十二代住持善譽行念欽白

(表)

修補者 轉法輪行念  
横濱市弁天通三丁目  
全補助者 柴田吉三郎 佛工 滝川繁蔵  
全 二丁目 東京浅草区神町  
全補助者 亀ヶ谷兼二郎 佛工 横山松太郎

(裏)

吽形像台座上部納入 修理銘札



(表)



(裏)

昭和 29.8. 修理  
東京浅草草菊屋橋 大仏師 前田幸慶  
醍醐派修験道彫刻師 宮田覚道和尚

(表)

昭和 29.8. 修□  
東京浅草草菊屋橋 大仏師 前田幸慶  
東京浅草松葉町 修験道醍醐派 彫刻師 宮田覚道僧正

(裏)

	〈 阿 形 像 〉	〈 吽 形 像 〉
像高（髻頂～軸足）	250.0	242.2
頭頂～顎	42.4	41.0
面 幅	26.5	26.1
耳 張	30.2	30.4
面 奥	35.1	34.7
胸 奥	41.7	43.6
腹 奥	48.0	47.0
肘 張（右肘外～左肘外）	106.1	99.3
最大手張	120.6	99.5
足先開外	98.1	99.3
足先開内（右踵～左踵）	20.4	23.5
裾 張	124.1	127.5
足柄高左	21.1 新補	20.2 新補
足柄幅左	6.8 "	6.1 "
足柄奥左	10.0 "	11.2 "
足柄高右	20.3 "	20.6 "
足柄幅右	7.0 "	6.1 "
足柄奥右	10.0 "	10.8 "
像最大幅	124.1	126.2
天衣張（脱落により）	不 明	不 明
重 量	196kg	187kg
髻寸法（高×幅×奥）	18.4 × 19.1 × 20.3	20.8 × 19.7 × 21.8
足寸法（長さ×幅）	左 41.3 × 21.8 右 40.9 × 22.3	左 40.8 × 22.4 右 41.8 × 21.4

我人修補仁王尊像三軀組依

法興隆真宗弘通寺門清博

六省障礙淨業增長雄將明必

九月十五日六日奉帝國籍倉大佛

德院從中興十二人任持善譽所念歎

# 彫刻史から見た高徳院仁王像について

清水眞澄

## はじめに

高徳院仁王像は、銅造阿弥陀如来像（鎌倉大仏）の参道入り口に南面して建つ仁王門の左右に、向かって右に阿形像、左に吽形像が安置されている。両像とも通例の仁王像と同様に、忿怒の相で宝髻を結び、上半身は筋骨逞しい裸で下半身に裙を着け、中央に向けて片足を半歩出し、顔と体をその方向に捻って立っている。阿形像は開口し、右手を下して全指を開いて腕を内側に捻り、左手を肩上に上げて金剛杵を振り上げ、吽形像は口を閉じ、右手は全指を開いて腰上で構え、左手は腹横で金剛杵を上から握っている。この形は、日本の鎌倉時代後期以降に定型化する仁王像の一般的なスタイルに則っているが、それがどのように創られてきたかを、仁王像の意味と役割を含めて、形姿の変遷からたどることにする。さらに、江戸時代中期と考えられる制作時期を歴史史料から検討するとともに、今回行われた解体修理によって判明した造像と修理技術の工夫などについても考察してみたい。

## 仁王像の歴史と造形

仁王像は、二王像、金剛力士像とも呼ばれ（本修理報告書は仁王像に統一する）、境内あるいは石窟の入口（門）に守護神としての左右一對に安置されるが、本来は『増一阿含経』などが説くように釈迦如来を護衛する役目の神で、執金剛神、密迹金剛力士などと称され一尊であった。甲冑をつける武装形の像と筋骨たくましい裸形像があり、金剛杵などの武器を持ち、顔は眉を逆立て、大きく眼を開いて相手を威嚇する忿怒の相で、一對の場合には、口を大きく開ける像を阿形像、しっかりと結ぶ像を吽形像と称している。

中国では、仁王像の源流とされる守護神像が、雲岡、龍門、鞏県などの石窟に北魏時代の像が知られるが、棋門の守護神としては、北魏前期に造立された雲岡石窟第八窟の着甲した武装神形の像が最も早く、その後龍門賓陽中洞石窟や魏字洞に見られるような着甲せずにX字状の天衣を着ける像が現れ、着甲像とともに併存していく。そしてインドに祖形がある裸形の仁王像が中国で登場するのは、北斉時代の龍門石窟薬方洞外壁像が早く、<sup>①</sup>続いて唐時代の同石窟奉先寺堂北壁の巨像などがあり、それが日本にもたらされ定着したと考えられる。

日本の仁王像の形は、奈良時代の東大寺法華堂の塑造執金剛神像のように一尊で安置されている例はあるものの、基本的に門の左右に安

置されるので、中央の入口に向かって構え、門に向かって左に置かれる阿形像は、左足を軸にして右足を少し前に出し、上半身を右前に傾け、吽形像は阿形像と対象に右足を軸にして立ち、左足を前に出し上半身を左前に傾けている。そして、両手の位置や指の形、持物などに変化をつけて、ほぼ対象的あるいは攻守の姿に造られるのが一般的である。<sup>(2)</sup>ここでは各時代の仁王像に規形があつたのかどうか、その形が何時頃からどのように出来上がったかを、作例を追いながら、検討していく。

日本における仁王像の作例としては、奈良・長谷寺の「銅板法華説法図」下段の左右に配される力士像と、奈良・法隆寺の中門に安置される塑像が最も早いとされている。「法華説法図」（八四×七五×二・三〜三・〇cm）は、『法華経』「見宝塔品」にある釈迦が法華経を講説した際に塔が湧出し、多宝仏が釈迦に座を空けて二仏が並坐したという有名な場面を表したもので、それらの図を鑄出した銅版に千体仏を貼り付けており、中央下段の銘文によって、戊の年（六八六または六九八年）に弓福寺の僧道明が天武天皇の転病延寿を願つて制作したことが判明する。レリーフの仁王像は、現在向かつて右の像が失われ、同左の開口する短軀でユーモラスな一体が残されている。

法隆寺中門の仁王像は、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』天平十九年（七四七）によれば、和銅四年（七一）に造立されたとされる。像高（現状）が阿吽形ともほぼ三七七cm前後と大きく、塑像という脆弱な材質の上、風雨に曝される仁王門に安置されているので、再三修理されているものの、今日まで遺されていること自体奇跡に近いもの

がある。後世の補修があるとはいえ、現在の像容は概ね力強く動きのある姿勢に破綻に破綻はなく当初の形を踏襲していると考えられている。この長谷寺の銅板法華説法図と法隆寺の中門の仁王像は、いずれも裸形で宝髻を結び、腰から下に裙をまといつて天衣を翻すという点では、日本の仁王像の姿の原点といえる。

一方甲冑を着けた仁王像は、前述したように中国ではかなり遺されているが、日本での遺例は少なく、著名な像では東大寺法華堂の脱活乾漆造仁王像と、単独像として安置される前記した同堂の塑造執金剛神像が著名な作例として挙げられる。

平安時代の早い作例では、十一世紀初とされる福島・法用寺像がある。内側の手を下におろし、外側の手は肘を曲げて肩下で構えて、ほぼ左右対称の姿で、全体を一材の巨木から彫出しているので、ほとんど動きがなく直立し、顔は正面を向き、踏み出す片足もわずかに出しているにとどまっている。他にも近年の調査によってこの時期の像が明らかにされつつある。

次に十二世紀の制作年が確かな基準作例として京都・醍醐寺像と同・峯定寺像が挙げられる。醍醐寺像は、像高が阿形三五九cm、吽形三六四cmの大きな像で、『醍醐寺雜事記』『義演准后日記』によれば、長承三年（一一三四）に大仏師勢増、仁増によって造立され、もと南大門に置かれていたが、慶長十年（一六〇五）現在の西大門に移されたことが知られる。頭が他の像に比べて大きく、顔を真横に内側に向けて、肩越しに睨み付けている形は珍しく、筋肉の表現や、裳裾の翻りなどは、平安時代の像らしく控えめである。

峯定寺像は、阿形二七二cm、吽形二七五cm、体内の墨書銘によって、長寛元年（一一六三）仏師良元が造立したことが判明する。醍醐寺像に比べると一回り小さいが、体全体の動きがあり、頭部が大きい点は醍醐寺像と共通している。眼鼻を顔の中央に集めてしかめた顔つきに特徴がある。

この醍醐寺像と峯定寺像は、阿形像が左手を上げて肩上で金剛杵を取り、吽形像は右手の全指を開いて腰の辺で構え、内側の手をそれぞれまっすぐ下に伸ばし、片足を踏み出して腰を捻り、動きがみられる。後世の基本的な形はこの像あたりから始まると考えられ、ここでは両像とも内側の手をまっすぐ下に伸ばしている点と、吽形像が全指を開いて腰の辺で構えているところに注目しておきたい。

全指を開いて構えるスタイルは、歌舞伎など古典芸能の見得を切る場面でも使われる形である。しかしこの形のルーツは古く、中国・漢時代の画像磚（河南省南陽地区出土）や打虎亭墓の壁画（河南省密県）に見られ、これが龍門石窟賓陽中洞力士像のルーツになっているとの指摘がある<sup>③</sup>。

鎌倉時代の作例は、かなりの作例が遺されており、また優品も多いので、著名な像を挙げてその形姿を見てみよう。

その冒頭を飾るのが東大寺南大門の仁王像である。治承四年（一一八〇）に源平合戦により焼失した東大寺の復興は、勸進僧重源によって行われ、最後の締めくくりとして南大門は再建され、仁王像も運慶一門によって造立された。仁王像は像高が阿形八三六m、吽形が八四二mの巨像で、平成五年（一九九三）まで行われた解体修理に

よってその全貌が明らかになった。特に阿形像が持つ金剛棒の矧ぎ面から銘文が、吽形像の体内から奥書に仏師名などを記した経巻が発見され、勸進は重源、作者は阿形を運慶、快慶が、吽形を湛慶、定覚が担当し、全体を運慶が監修し、建仁三年（一一〇三）七月に造り始め、わずか二カ月ほどで造立したことが判明した。また、制作技術は、解体修理によって、基本的な頭体幹部材として縦材八本を組み合わせ、その前面と背面に細い材をスノコ状に貼り合わせて体の形を成型する、他に例のない造り方も判明した。

この東大寺南大門の仁王像は、前記したように鎌倉時代初期に運慶一門によって造立された著名な像である。ところがこの像は、日本の通例の仁王像と異なり、阿形像を向かって左に、吽形像を右に配し、向かい合って安置している。そして、阿形像は、右手を脇腹に置いて金剛棒の下端を支え、左手は肘を曲げて全指を開き、吽形像は、右手の肘を高く上げて三、四、五指を開き、左手を下におろして宝棒を握っている。この姿は、京都・清凉寺釈迦如来像の体内に納入されていた墨刷弥勒浄土図の金剛力士像と同じ形であることから、北宋時代の金剛力士像を手本にしたと指摘されている<sup>④</sup>。

東大寺の復興にたずさわった重源は、入宋三度とされており、宋様式を取り入れた南大門に安置する仁王像に、やはり宋の様式を取り入れたことは極自然である。このスタイルの仁王像は、このうち京都・万寿寺と三重・府南寺の仁王像が挙げられるが、その数は多くない。

鎌倉時代の仁王像は、その後山口・阿弥陀寺像や長野・長勝寺像のように平安時代の形を継承する像や、京都・金剛院像のように阿吽両

像が内側の手を真つ直ぐ下に下し、外側の手を上に振り上げる左右対称の像など多少の変化を見せながら、阿形像は開口し、右手を下して全指を開いて腕を内側に捻り、左手を肩の上に上げて金剛杵を振り上げ、吽形像は口を閉じ、右手は全指を開いて腰上で構え、左手は腹横で金剛杵を上から握る（あるいは全指を開く）形がしだいに定型化していく。この像の特徴は、吽形像が左手の肘をわずかに曲げることで、全指を開いて腰辺に置く右手とともに、受けの形がしつかりと決まり、攻撃的な阿形像と一対になって、有機的なつながりである姿が生まれた点である。典型的な例として知られる旧興福寺西金堂の仁王像は、体を大きく捻り裾をなびかせた鎌倉時代を象徴する雄渾な像で、建久年間（一一九〇～一一九九）定慶作の伝えがある。また、京都・妙法院の湛慶の作と考えられる二十八部衆中の仁王像（密迹金剛像、那羅延堅固像）は隙がないオーソドックスな形体に目を見張る。また肥後定慶作の銘をもつ仁治三年（一二四二）兵庫・石籠寺像と建長八年（一二五六）岐阜・横蔵寺像は、前者が古様であるのに対して、後者は後世の仁王像の手本になるような姿を形成し、十五年ほどの進歩が感じられる。その他京都・妙法院、宝積寺、勝持寺、高知・禅師峯寺などの姿をたどっていくと、この頃に後世定型化した仁王像の姿が形成されたと考えられる。

そして江戸時代の作である本像も、この形を手本にして造立されたのである。

## 史料から見た本像の制作時期

鎌倉大仏の江戸時代における修復と仁王像の歴史については、鈴木良明氏が本書の「近世鎌倉大仏の復興と仁王像」で明快に述べられているが、仁王像についてはこの度の解体修理によって、複雑な造像と修理の技法が判明したので、屋上屋を重ねることになるが、史料についてもここで検討することにする。鈴木氏の論考と併せてご覧いただきたい。

仁王像に関わる史料は、次の七点が挙げられる。

- ① 寛保元年（一七四一）十一月、高德院が寺社奉行に仁王像及び表門建立の願書を提出する。
- ② 寛保二年（一七四二）七月十日、銅造八尺仁王像を神田の鋳物師西村和泉守が完成し、金杉町の勧進所に引き取る。（『日鑑』）
- ③ 寛保三年（一七四三）三月八日、高德院が焼失する。（『日鑑』）
- ④ 同年三月、木造仁王像造立のための勸化を始める。（『日鑑』）
- ⑤ 同年五月二十一日、木造仁王像を造り始める。（『日鑑』）
- ⑥ 同年九月木造仁王像完成する。（『日鑑』）
- ⑦ 宝暦十一年（一七六一）養国上人横須賀市田戸庄聖徳寺に転任。高德院朱塗り山門を同寺に移築。（特別展図録『鎌倉大仏と阿弥陀信仰』神奈川県立金沢文庫 二〇〇二年十月の年表）
- ⑧ 明和五年（一七六八）高德院仁王門建立のために、相続講他各所より借金する。（特別展図録『鎌倉大仏と阿弥陀信仰』神奈川県

立金沢文庫 二〇〇二年十月の年表)

\*『日鑑』は、鎌倉大仏を復興した養国上人が享保十八年三月から寛保三年九月までを記した『大仏鑄掛修復鉢願之日鑑』(『大仏尊再興記』とも記す)の略記。

\*⑦⑧の年表の典拠は不明。

本像は史料④⑤⑥の仁王像と推定されるが、いくつかの疑問もある。史料の内容と疑問点は次の通りである。

1、①は、寛保元年(一七四一)十一月に寺社奉行所に提出した願書で、往古安置の仁王像は零落し、多年別所に置いていたが、表門も大破しているの、門の建立と仁王像を造立し安置したいとある。そして、②により翌年七月に神田鑄物師西村和泉守によって銅像仁王像が造られたことが知られる。通常の木像とは異なる銅造仁王像の作成は、一連の大仏復興事業の中で、享保二十一年(一七三六)四月に大仏の後頭部に三尺四方の戸口扉と螺髻を付け、六月に蓮華座の花弁を作成した縁で、神田鑄物師西村和泉守に依頼したのである。

この時表門の改築については不明。

2、③は寛保三年(一七四三)三月八日に高徳院が焼失した記録である。

「諸堂不残焼失」「本尊並びに過去帳の類大切之什物ハ取出シ」「大仏尊像何事も無之」とあり、特に「表門壱ヶ所相残」が注目される。この残された表門が、前年建立されたかもしれない新しい門か、大破したままの古い門かは分からないが、前者の場合には、おそらく銅造仁王像は残されていただろうし、後者の場合には、銅造仁王像

は寺院内に仮置きされていて、火災で焼失した可能性が考えられなくもない。「表門壱ヶ所相残」とあるので、「表門及大破」といっても、形はとどめていたのではなからうか。

3、本像に比定される、その後の木造仁王像の制作については、寛保三年(一七四三)三月本堂他が焼失したその月に勸化が始まり④、五月二十一日に造り始め⑤、九月に「一木像二王出来ニ付鎌倉江船而引取候事、船賃金三步五百文相払候」として完成⑥したことになる。船で引き取った場所はどこであろうか。

この木造仁王像の制作については、火災との関係が問題になる。前記した銅造仁王像が火災で焼失したので、木像を造立したと考えるのが自然であるが、これには前記したように銅造仁王像が寺院内に仮置きされていて、火災で焼失したことが前提になる。

4、また、(1)木像造立の勸化を始めたのは、寛保三年(一七四三)三月で、寺が焼失した同じ月なのは、早すぎないだろうか。そして勸化帳に、火災の復興について記されていないのは何故なのか。(2)高徳院は、表門を残して全堂宇を焼失するが、最初に古い破損した表門(銅像が焼失したとすると、残されたのは古い門)に安置するための仁王像を造るだろうか。(3)高徳院常念仏焼失の記事にも、仁王像造立のことが記されていないのは何故か、など分からないこともある。ただし、史料の『日鑑』は養国上人の日記とされているが、後日の記録を整理して事項毎に記事にしているので、当然前後していたり漏れている部分もある。

5、もう一つの問題は、宝暦十一年(一七六一)に、養国上人が横須

賀市田戸庄聖徳寺に転任した際に、高德院朱塗り山門も同寺に移築との記録である（この出典が不明であるが）。この時点で、朱塗り山門とともに仁王像が高徳院に存在しない可能性も考えられる。そして、明和五年（一七六八）に仁王門再建のために相続講他各所より借金をした記録は、山門を再建するためのものと考えられるが、仁王像も新たに造られた可能性も視野に入れなければならない。

本像の建立を寛保三年（一七四三）とするものの、史料上のいくつかの疑問を解決するにはいくつかの推論を重ねねばならず、修理の跡がそれを物語っている。

## 本像の造像技法と修理技法の問題点

一般的に仁王像の造像技法は、当然のことながら他の像と同様に、平安時代後半以降一木造りから寄木造りへと変わっていくが、すでに指摘されているように、仁王像が直接風雨に曝される場所に安置されることを考慮してか、鎌倉時代になっても一木造り、あるいはそれに近い木取りをしている例をままた見受けることがある。

江戸時代の作である本像は、寄木造りで玉眼を嵌入し、全身に彩色を施している。頭部を前後二材に矧ぎ、首柄で体幹部に差し込み、体幹部も前後矧ぎとし、その体幹部に両手を肩で矧ぎ、軸足は体幹材と共木とし、踏み出した足の腰下から先は別材としている。このような技法は、鎌倉時代の仁王像の一般的な造り方を継承しているといえる。

今回の修理によって判明した技法については、本書の修理報告の中

で詳しく述べられているが、ここでは本像にとって極めて重要な点について考察する。

その第一は頭部である。玉眼がはずれ、その周辺を含めて損傷していたものの、木質自体はしっかりとしており、面貌の表現は体幹部とそれほど違和感はない。しかしながら首柄は体幹部の首孔より一回り小さく、木面の肌合いにも違いがあり、頭部は何らかの理由で造り代えられた可能性も考えられなくもない（修理工程写真No.12）。ただし、もしその場合でも制作時期は大きく異なるものではなく、当初の頭部の雰囲気そのまま伝えているといえる。

第二は、修理前には両像とも左眼の玉眼が落ちていて、印象が非常に悪かったが、残っていた右眼の玉眼を見るとガラスだったので、これが表情を硬くしていたかもしれない。この玉眼は明治三十六年（一九〇三）の修理記録の「玉眼四ツ」に相当し、この時に造られたものである（修理工程写真No.14）。これをこの度水晶に変えたので、眼に奥深い光が宿ったといえる。

第三には、両像とも膝上で横にのこぎりを入れて切断し、それを接いで（いわゆる芋付）にしている点である。仁王像のように頭部や上半身が重く、動きのある立像でこのように構造上弱い仕様は考えにくいことで、どう解釈すべきか修理中通して問題になった（修理工程写真No.48）。例えば修理など何らかの理由で、像を移転するに際して乱暴な話なのだが、やむを得ず切断した可能性も否定できない。像の下半身が重く重心が下にあるように感じるのも、そこに原因があるかもしれない。江戸時代の仏師の想像つかない工夫とすることもできよう。

## 結び

高德院仁王像は、冒頭に記したように両像とも通例の仁王像と同様に、太い眉を逆立てた忿怒の相で宝髻を結び、上半身は筋骨逞しい裸で下半身に裙を着けている。阿形像が開口し、右足を半歩前に出し右手を下して全指を開いて内側に捻り、左手は肘を曲げて肩の上で金剛杵を握るのに対し、吽形像は口を閉じ、右手は全指を開いて腰上で構え、左手は腹横で金剛杵を上から握っている。このような両像のスタイルは、鎌倉時代中期以降の極めてオーソドックスな仁王像の形姿を継承しているといえる。下半身に着ける裙は上部で折り返し、裾の前面は膝下までで、背面は大きく長く広げている。顔は足先の少し先に視線を落とす位置に向け、胸と腹を前に出し、幾分猫背で、手足の動きに若干ぎこちない面もあり、裙の襞や翻り方は重い。

制作年については、史料から寛保三年（一七四三）と考えられるが、前記したように何点かの疑問がないわけではない。ただ、造形と造像技法から見ても十八世紀中頃の作と考えることに違和感はなく、また修理個所の所為についても、明快な答えがでたわけではなく、かなり複雑な想像を超えた経過をたどったのではないかと考えられる。

この度は損傷箇所、欠損箇所の木屎、補材による修復、主として体幹部の構造的な補強、体幹部と腕、足の強固な接合、玉眼の水晶による新補、像が安全に立つための足柄と台座の工夫、表面の漆による塗装など、極めて丁寧な全面的な解体修理が施された。恐らく今後高德院の守護神として長くその形をとどめると確信している。

## 注

- (1) 『六大寺大観』第三卷（岩波書店 昭和四十四年）
- (2) 倉田文作『三王像』（『日本の美術』一五一号 至文堂 昭和五十三年十二月）
- (3) 八木春生「中国南北朝時代における金剛力士像についての一考察」（『中国仏教美術と漢民族化―北魏時代後期を中心として―』法蔵館 平成十六年二月 所収）
- (4) 熊田由美子「東大寺南大門仁王像の図像と造形―運慶と宋仏画」（『南都仏教』五五号 昭和六十一年）

（三井記念美術館館長）

# 近世鎌倉大仏の復興と仁王像

鈴木良明

## はじめに

鎌倉時代に铸造された鎌倉高德院の「銅造阿弥陀如来坐像」は我が国の歴史・美術史上等の貴重な文化財として国宝に指定されている。同院所蔵の『鎌倉大仏縁起』<sup>(1)</sup>（以下『縁起』と略記）によると、明応四年（一四九五）の地震と津波で「大仏の内堂」「二王門」「三門」等悉く倒壊・流失し、以降大仏殿の再建もなくそのまま今日まで坐しているといい、「露座の大仏」で夙に親しまれてきている。

この大仏尊像や寺内の安穩、ひいては仏法の守護をすべくいつしか奉安されていた木造仁王像一対がこの度解体の修理を終え表門（仁王門）に再び安置された。解体修復に際し胎内から銘札が発見され、<sup>(2)</sup>本像の来歴とともに寺史に加える新資料を得た。

本稿は木造仁王像一対について既知の資料などを整理し、本像の造立経緯を概観しておこうとするものである。

高德院仁王像の造立については、当院所蔵の『大仏鑄掛修復托鉢願之日鑑』（「大仏尊再興記」とも、以下『日鑑』と略記）に記事がある。

この『日鑑』は『鎌倉市史』（近世史料編・第二）に翻刻収録されているが、<sup>(3)</sup>享保十八年（一七三三）三月から寛保三年（一七四三）九月まで、約十年間に及ぶ大仏の修復に関して当寺の住持養国によってまとめられた日記である。ただ、日記とはいえ日並を追って記されている

る訳ではなく、後日に諸記録をもとに事項毎に整理されているため記事に前後が見られたりもするが、この期に行われた大仏の修復事業の概要が知られる貴重な資料となっている。なお、この『日鑑』などをもとに『鎌倉市史』（通史編）<sup>(4)</sup>は「鎌倉の大仏」を立章し、近世における鎌倉大仏の修復経過とともに仁王像の造立に関しても要領よく纏められているので、本稿はこれらを参考にしつつ述べておくことにしたい。

## 祐天上人の大仏復興

近世における鎌倉大仏の本格的な修復事業は、元禄十六年（一七〇三）十一月に当地方を襲った所謂「元禄地震」に端を発している。この地震により大仏は「前方之台坐石段崩、大仏三尺程下り傾」という被害であったが、長年の風雪に耐えてきた露座の大仏は地震の害も加わって一層朽損が進んだのであろう。こうした大仏の荒廃した姿から修復を発願したのが、後に増上寺三十六世となる顕誉祐天上人である。『縁起』によれば、宝永元年（一七〇四）祐天上人が小石川伝通院在住の時、大仏の石座の修復や大仏尊像の穿裂を繕った。上人のこの大仏復興志願に江戸浅草の商人野嶋新左衛門泰祐が喜捨して、正徳二年（一七一一）常念仏を開闢、翌年寺地に常念仏堂が成り、大

仏における念仏信仰の基盤が整った。ここに祐天上人は有信の弟子野嶋新左衛門泰祐の作善を讃えて「高德院」の法名を授け、常念仏の道場に「高德院」の額を掲げたという。

このように正徳期の祐天上人による大仏の修復事業は一応終了した。発願主の祐天上人を中興開山に、野嶋新左衛門を中興開基として大仏と高德院が新たに始動したのである。

しかし『縁起』は、中興開基である野嶋新左衛門が正徳二年、三年（一七二二、三）頃に流罪に処せられ、<sup>6)</sup>享保六年（一七二一）三月に御赦免となつて帰府したものの、家財闕所で資糧も尽き常念仏も中絶の危機に瀕したと続く。

## 養国上人の大仏修復

祐天上人の正徳期大仏修復から二十数年のち養国という僧が高徳院住持に任じられた。野嶋泰祐と養国は親子の「好身（誼）」を結んでいた因縁にあったといい、泰祐の強い推挙によって本山の光明寺に働きかけ享保十八年（一七三三）住持に任命されたのである。養国の高德院住職へとかかる動向からみれば、祐天上人の大仏修復志願を継承すべく泰祐が託した人選であつたのであろう。

入院した養国は、大仏の胎内が鳥類の糞で汚損、古骨、石塔などが散在している状況を見て、直に大仏修補の大願を起こしたと『日鑑』の冒頭に記している。大仏の尊像はといえば、祐天上人が所々に鑄掛修復で繕つたものの、惣身には三、四寸の穴が開き螺髪も抜け落ち、

背中 of 扉もなく胎内に鳩雀が巢食い、雨天時には腐朽の穴からの浸水で衣襲などに溜水のあるような状態であつた。享保二十年（一七三五）『鎌倉大仏修造勸進帳』<sup>7)</sup>には、先に大仏尊像の修復、蓮座・石壇の再造を果たしてから「而後尚慕先規造立大殿」とあるので、養国の目論む復興の先には「大仏殿」の再建という大願があつた。

養国は修復事業に邁進していくことになる。この時の大仏修補の経過記録が享保十八年から寛保期にかけて養国自身の記した『日鑑』なのである。

『日鑑』により養国代の大仏修復の経過を概観しておくことにしよう。

まず、高德院の住職養国は寺社奉行所宛に托鉢許可願を享保十九年（一七三四）五月に出願した。願書は、江戸市中での七ヶ年間（元文五年・一七四〇まで）の托鉢で喜捨を集めて、大仏の鑄掛修復を行いたいということであつた。この出願に対し寺社奉行所は、托鉢が出家本来の行為であるので「勝手次第」だが、御免勸化と紛れないようにと条件を付し承認した。これにより芝金杉一丁目の宿所を勸進所と定め江戸市中の募縁活動を開始した。

江戸市中の托鉢は順調に進んだようで、享保二十年（一七三五）には『縁起』や「鎌倉大仏修造勸進帳」が成り、また江戸で「大仏講中」が結成され勸進活動の支援体制も整つた。

一方、江戸での旺盛な勸進活動とともにさまざまな修復費用捻出の方策も採られている。祐天上人などが寄付した常念仏料の運用による利金もそのひとつであつた。<sup>8)</sup>また、勸進活動は江戸市中に限つたこと

ではなく三浦半島の村々等にも及んでいたことでもわかる。<sup>(9)</sup>

こうした勸進活動の結果、白毫の寄進や螺髪（カサネ）の資糧寄進なども相次ぎ、元文元年（一七三六）には螺髪や蓮弁が江戸神田の西村和泉守によって鑄立てられ、翌元文二年四月には「惣門」に「獅子吼山」も掲額し、同年七月には大仏の開眼供養が厳修され、大仏尊像の一連の修復事業が完了した。

## 大仏修復の勸進継続と仁王像

大仏の鑄掛修復を一応完成させた元文四年（一七三九）九月になって、高德院は再び寺社奉行所に願書を差し出した。先の享保十九年（一七三四）五月の出願は、大仏鑄掛修復助成のため江戸市中での七ヶ年間（元文五年・一七四〇まで）の托鉢御免であった。しかし既に元文二年（一七三七）には大仏の開眼供養を行っているように、大仏の鑄掛復興が名目上一応終了したため、今回は残余の期間を引き続き修造助成として江戸市中での托鉢の許可を仰ごうとの趣旨であった。その為の宿所も増上寺霊屋別当恵眼院下飯倉町の順了寺境内に決まった。

ところが、元文五年三月になって、養国は順了寺で縁起・仏書講釈名付けて常説法所を企画して寺社奉行所に出願を試みたところ、増上寺の添簡が必要であった為、増上寺大僧正の尊誉了般に添簡を願うこととなった。しかしどういう理由かわからないが、どのようにしても了般の了解が得られず、ついにはこの常説法所の開設を断念せざるを得ない結果となり勸進活動の拡充は望めなくなった。

こののち寛保元年（一七四一）十一月に『日鑑』は江戸での仁王像造立の記事を載せている。即ち、公儀へ提出した以下の願書である。

乍恐以書付奉願候事

一 鎌倉大仏高德院申上候、愚院表門ニ往古安置仕候二王之像及零落候ニ付、多年別所ニ納置申候、今般托鉢之助力を以致再興、尤有来候表門茂及大破候ニ付、是又建立作事仕、右二王致安置度奉願候、御免許被成下候ハ、難有可奉存候、以上

寛保元酉十一月

鎌倉大仏 高德院 印

寺社御奉行所

これによれば、往古より仁王像があつて零落しているため別所にあるといい、托鉢の助力によって大破の表門（仁王門）ともに再興したいというものであった。養国は、江戸常説法所開設は断念したものの托鉢勸進活動を継続しようとしているところから、大仏鑄掛修復事業の延長線上に仁王像再興を位置づけ、さらには諸堂宇の整備も志向していたのであろう。

ただこの出願に対して容易に御免となるような筋ではないという予測もあった。というのは、目黒祐天寺の仁王像造立が、内証にして一位様（桂昌院）の御願であつても漸くにして成つたものであつたし、大仏仁王像は往古より存在したとはいえ新規造立に近く「存外六ヶ敷」といふ認識があつたからである。しかし、この出願に対する結果は、予想に反し寺社奉行の判断をするまでの案件にはなく、地元代官所への届出で事済むこととなった。

別所に置かれ零落していた仁王像の材質は不明であるが、再興すべ

き仁王像は銅造であった。出願の翌寛保二年（一七四二）七月十二日には完成し引取っている。『日鑑』は大勢の講中若者組が「車二乗」で金杉一丁目勸進所にて、「唐金之ニ王像高八尺台座共ニ壹丈之長サ出来ニ付神田鑄物師西村和泉守より請取」と記す。

この後銅造の仁王像は鎌倉へ運ばれた。鑄立代諸色で金百八両、鎌倉までの引取・雑用費で六両かかった。この時点で銅造仁王像がどこに安置されたのかは明確な記録がない。

ところが、鎌倉へ銅造仁王像が運ばれた翌寛保三年（一七四三）三月八日朝五ツ時に本堂脇より失火して、高德院焼失したとの報が芝金杉の養国の元へ届いた。本尊や什物は焼失を免れ、大仏尊像も無事であったが、「表門」を残し諸堂残らず焼失したというのである。

ここで問題になるのは「表門」と仁王像の関係である。先に見た、寛保元年寺社奉行所宛の願書に「愚院表門ニ往古安置仕候ニ王之像」を「再興」したいとあるところから、表門に銅造の新仁王像が本来安置されるべきであろう。しかし表門は焼失を免れたとはいえ、大破している状態が続いているのであろうから、新銅造の仁王像は表門に安置されなかった可能性がある。想像を逞しくすれば、表門に奉安されていなかったがために銅造仁王像は火損を蒙ったのかも知れないということである。また、往古より有った零落して別置してあった仁王像はどうなったのであろうか。

寛保三年三月八日の高德院焼失という災禍に屈することなく一方で木像の仁王像の造立が開始されているように見える。高德院焼失月と同じ「寛保三年三月」に漢字と和字の序文が添えられた「二王観化帳」

が作られ、「右両序観化帳者寛保三年亥三月より木造之ニ王像之勸化なり」と注記し、今回の仁王像が鑄造像ではないと区別しているのは、何か特別な事情があったように思える。この勸化序が何時つくられ発効したのか明確な日付はなく、また序文は一般的な仁王像の利益を説くのみで火災の記載が一切無く疑義が残るが、高德院の火災で「表門」に安置されていなかった銅造仁王像が損傷したため、新たに木造の仁王像造立を試みたと考えた方が自然であろう。

そして、勸化帳作成から約二ヶ月後の同年五月二十一日に「今日より木造ニ王造立、てうな（手斧）立初る」とあり、同年九月には「木像ニ王出来ニ付鎌倉江船ニ而引取候事、船賃金三歩五百文」とあって、勸化開始から約半年後には木造仁王像が完成し鎌倉へ運ばれている。

この度平成の修復を終えた「木造仁王像」は、この寛保三年時造立の尊像である可能性が高いと思われるが、様式や構造面、寺史などからの検討も必要かと思われ、即断は避けておきたい。なお、大仏の中興開基旦那である野嶋新左衛門泰祐は、寛保三年四月に木造仁王像の完成を待たずに江戸で終命した。法名…高德院深蓮社法誉大異泰祐居士。

### 高德院の復興と仁王門

寛保三年の火災で表門（仁王門）のみを残して諸堂残らず焼失した高德院は早速堂宇の再建を進めている。

延享元年（一七四四）「秋分」の寺社奉行差免の開帳として大仏別

当高德院宛に次のように出された。<sup>(10)</sup>

相州鎌倉大仏別当 高德院

右自坊去ル亥<sup>(寛保三年)</sup>三月八日不残致焼失、貧寺故再建自力ニ難叶ニ付、

本尊座像之阿弥陀如来其外靈宝等、来ル子七月朔日より同八月<sup>(延享元年)</sup>

晦日迄日数六十日之間、於本所回向院境内開帳仕度旨、子三月<sup>(延享元年)</sup>

<sup>(山名豊就)</sup>因幡守方江願出、同月六日於内寄合願之通差免之

延享元年（一七四四）七月朔日より八月晦日まで江戸本所回向院境内での開帳の目的は明らかに火災後の高德院の「再建」にあった。この出開帳での喜捨によってどの程度再建を果たせたのかよくわからないが、現在高德院境内に残る寛延二年（一七四九）銘「石造手水鉢」（江戸飯倉猫町伊勢屋忠兵衛寄進）が示すように、江戸住民の支援と養国による火災後の復興努力が続いたのである。

こののち養国上人は宝暦四年（一七五四）に隠居し田戸（横須賀市）聖徳寺へ転じ、同寺の再建に尽力し宝暦十一年（一七六一）八月二十九日に同寺で遷化した。<sup>(11)</sup> 淨蓮社薫上人到阿養国円宿和尚。

寛保三年（一七四三）の火災で焼失を免れた表門（仁王門）等について付言しておきたい。仁王門と仁王像は不離の関係にあるため、仁王像造立にかかわり若干の手掛かりになるかと思うからである。

明治二十八年（一八九五）五月の高徳院所蔵資料によると「二王門間敷四間 奥行式間三尺 坪数拾坪 建築年代 正徳二辰年改築 東京神田野島新左衛門寄附」や「…建築年代 正徳二辰年 東京神田野島新左衛門寄附」などと記され、正徳二年（一七一一）に仁王門が改築、或は建立されたという伝承があったようである。また、『鎌倉近世史料』（長

谷・坂ノ下編）所収の「長谷・坂ノ下近世略年表稿」<sup>(12)</sup>には出典を記していないが、「正徳二年 野島新左衛門高德院に仁王門・仁王像及び仏前の銅燈籠（鑄物師太田駿河守正義）を寄進」とある。

享保二十年（一七三五）成立の『縁起』には仁王門や仁王像に係る記述はなく、これら伝承や記述の真否を直に検証できないが、正徳二年は祐天上人の大仏修復が完了し、野嶋泰祐の諸寄進があった時点であるので、正徳二年仁王門建立もあながちに否定できない。加えれば、貞享二年（一六八五）刊行の『新編鎌倉志』の「大仏図」には境内に門らしき建物が描かれていないので、仁王門の建立は少なくとも貞享期以降ということになる。また、先にふれた寛保元年（一七四一）の寺社奉行所に宛てた仁王像再興願書には「愚院表門ニ往古安置仕候二王之像及零落候ニ付、多年別所ニ納置申候」や「有来候表門及大破候ニ付、是又建立作事仕」とあるところから、この時点では大破している表門（仁王門）とともに零落して別所に置かれている仁王像がともにあったことになる。

なお、元文二年（一七三七）四月朔日には「惣門」に「獅子吼山」を掲額したという記事が『日鑑』に見える。この惣門が表門と同じかどうか問題となる。しかし、高德院はこの掲額の以前に本山の許可を得て山号を「獅子吼山」と改称しており、元文二年七月の大仏開眼供養に間に合わせ、既存の門に額を掲げ替えたとも考えられるので、仮に両門が併存していたとしても、正徳二年に仁王門が存在する説は一応成り立つであろう。

なお現在の仁王門は関口欣也氏の考察により明和五年（一七六八）

頃に再建されたと考えられている。<sup>(5)</sup> また、「聖徳寺（養国が隠居し、示寂した寺院）の朱塗山門は高德院から移築」されたという伝承もある。<sup>(6)</sup> ただ、表門、惣門は同じ門であるのか、それぞれ別個の門であるのか、また、明和五年（一七六六）に仁王門が再建されるまで木造の仁王像をどこに奉安していたのかなど疑問が残る。

しかし明和五年仁王門再建説を前提に考えると、ひとつ次のような推測も可能であるかも知れない。

当初、寛保期（一七四一～一七四四）に銅像仁王像をまず再興し次いで（並行して）仁王門を再建する計画であった。ところが、不慮の失火により銅造仁王像が損傷し、新たに木造仁王像を造ることとなった。銅造、木造の違いはあれ同じ像高であることを考えると、再建安置する仁王門も同規模の門を想定していたように思える。

しかし、高德院焼失よって仁王像を奉安する門の再建が覚束なくなった。寺社奉行所への願書に、仁王像を再興してから（並行して）仁王門を造るという建前であったため、銅造に替えて木造仁王像を先行して造立し、その後仁王門を建立する方針の転換があったのではなからうか。高德院にあった朱塗りの門（大破していた表門か、或は惣門か定かでない）は、養国上人によって宝曆の頃までに聖徳寺へ「山門」として移築されているので、そのため木造仁王像は出来たものの仁王門の再建は明和五年まで遅延したのではないか。

推測に推測を重ねた推論であり、種々の疑問点が残るのですべては後考を俟つとしておきたい。

江戸期における高德院の仁王門に関して『新編相模国風土記稿』『相

中留恩記略』『鎌倉寛勝考』に若干の記述や挿絵があるが、鎌倉大仏を紹介した多くの紀行文などには仁王門に関する記載は乏しい。

大正十二年（一九二三）九月一日に襲った関東大震災で大仏尊像をはじめ大きな被害を生じたが、高德院境内の建物では「仁王門ヲ除ク外」は全部倒壊したと報じられている。<sup>(7)</sup>

〔付記〕 この度の仁王像解体修理中に発見された銘札により、本像が明治三十六年と昭和

和二十八年に修補が加えられていたことがわかった。明治三十六年の修補については、高德院所蔵『明治三十六年臨時費控 仁王尊彩色及仁王門塗替日記會計帳』（半紙判横折綴、墨付八丁）が残っていて、この時の修補のありさまが知れるので参考のため末尾に付した。

#### 注

(1) 縁起は上・下巻。発願主は野嶋泰祐、その所望によって享保二十年（一七三五）当寺の住持養国が編述。『鎌倉大仏縁起』（鎌倉大仏史研究会編・鎌倉大仏殿高德院発行平成十四年）に再翻刻されている。

(2) 銘文は別掲（八十一頁）。

(3) 昭和六十二年七月 鎌倉市 吉川弘文館刊。

(4) 平成二年三月 鎌倉市 吉川弘文館刊。

(5) 「公儀等差出書類」『鎌倉市史』（近世史料編二）昭和六十二年七月 鎌倉市 吉川弘文館刊。

(6) 新井白石『折たく柴の記』に野嶋新左衛門の記載がある。それによると正徳四年（一七一四）五月に「正徳の金銀改鑄」が行われたが、この改鑄に対し野嶋新左衛

門が異議を唱え、それによって金銀流通の遅れが生じたため同年十一月に流罪に処せられたとある。

(7) 『鎌倉市史』(近世史料編二) 昭和六十二年七月 鎌倉市 吉川弘文館刊。

(8) 「公儀差出書類」の中に「高德院常香衣着用之事」を立項し「祐天大僧正並光壽院殿合而金子千両 御寄附」とある。(『鎌倉市史』(近世史料編二) 昭和六十二年七月 鎌倉市 吉川弘文館)

(9) 加瀬文雄「高德院銅像阿弥陀如来坐像裏蓮弁の刻銘」『鎌倉大佛史研究』(創刊号) 平成八年五月 鎌倉大仏史研究会編。本論文は現存する大仏の蓮弁四枚の刻銘を紹介分析している。蓮弁寄進者の多くは江戸在住者であるが、三浦半島の村々の人々の名が刻されている。なお現存する大仏の蓮弁は享保期に鑄造されたものである。

(10) 国立国会図書館蔵『開帳差免帳』。

(11) 文化四年十一月「大仏高德院略記」(『鎌倉大仏縁起』(鎌倉大仏史研究会編・鎌倉大仏殿高德院発行平成十四年)に翻刻。

(12) 高德院所蔵「明治二十八年古社寺名所旧蹟調査事項取調書」(高德院住職転法輪戒珠が神奈川県宛提出の控)などに記載がある。

(13) 昭和五十年十月 澤壽郎編 鎌倉市教育委員会発行。

(14) 野嶋新左衛門の寄進で現在残るものは、銅鑄製鍍金の燈籠(高二八四・七cm)がある。銘文には正徳二年正月十五日、寄進者野嶋新左衛門、鑄物師大田駿河などが刻されている。(『鎌倉市文化財総合調査目録』工芸・金工篇 昭和六十一年三月 鎌倉市教育委員会編)。

(15) 『鎌倉市文化財総合調査目録』(建造物編昭和六十二年三月 鎌倉市教育委員会編)に、関口欣也氏が高德院仁王門建立の柱代金を明和五年十月に調達している史料

を根拠に、現在の仁王門を明和五年頃の建立としている。

(16) 展示図録『鎌倉大仏と阿弥陀信仰』(平成十四年十月 神奈川県立金沢文庫)の「年表」に出典は明示されていないが宝暦十一年の記事として「高德院の円宿(養国)が聖徳寺に転住し、あわせて高德院の朱塗り山門を移築する」とある。また、上杉孝良氏によれば、聖徳寺の山門(現在しない)は朱塗りであって、養国上人が鎌倉大仏から移築したものであるという。

(17) 高德院所蔵「大仏修理工事落成報告書」(大正十五年二月十日)。本書は浄土宗務所に宛て高德院住職転法輪行念が提出した控書。『鎌倉震災誌』(昭和五年十二月 鎌倉町役場発行)には「仁王門は礎石より外れ、全體二尺尺前方(南)に移動した」とあり、門の倒壊はなかった。

(鎌倉国宝館館長)

## 仁王尊彩色及仁王門塗替日記會計帳

(表紙)

明治三十六年臨時費扣

## 仁王尊彩色及仁王門塗替日記會計帳

大佛殿高德院主十二代善譽行念誌 ㊦

明治三十六年八月四日始メ

## 仁王尊并門修繕日記

最初本年二月廿七日横濱義父柴田吉三郎(弁天通丁町三目四十四番地)老二仁王尊二躰修理ノ事ヲ相談為シ置キタリ、然ル處全八月三日該職二名尊体ノ見積ニ来リ、全四日夜改メテ来院、続テ當院ニ逗留尊像ノ修理ニ着手セリ、職工兩名ノ氏名ハ左ノ通り也

塗師職滝川繁蔵(横濱市末吉町一丁目七番地)

人形師横山松太郎(東京浅草区榊町一番地現住横濱市吉野町一丁目五)

八月五日 仁王尊ヲ仁王門ヨリ出シ奉リ、正シク修理工事ニ着手セリ

全六日 昨今両日ニテ尊像二躰洗濯シ終リ、十二畳半ノ表二階ノ工場へ引奉ケ奉ル(此處ニテ塗替ス)

八月六日 買物代トシテ金五円亀谷氏ニ渡ス、境内ノ亀ヶ谷兼二郎氏ニ工事中會計ヲ依托ス(柴田三郎二男)

全七日 夕刻松太郎買物二横濱ニ行一泊ス、金五円渡ス(亀谷へ)

全八日 柴田吉三郎老人来ス

全九日 今日ヨリ吉三郎老手傳世話焼方頼ム、続テ逗留、賄泊共亀谷宅ニテナス、職工二人ノ賄及宿泊ハ當院ニテナス

十日 当時柏屋第ペンキ塗職細井房吉ニ仁王門洪塗ノ事依托ス

全十一日 仁王門足場ニトリカ、ル

全十二日 細井仁王門ノ掃除ヲ始メ、職工三人ノ事

全十二日 細井塗替内金貳拾円也渡ス

全日 亀ヶ谷氏金拾円渡ス

全日 今日夕刻老人ト繁歸院ス  
全十三日 屋根塗替始メ、全日相済  
全十三日 大工仁王尊台座修繕相済  
全十五日 大萬へ拂ス、拾六円七十一錢四厘也  
全日 洪塗替始メ

全十五日 繁蔵濱ヨリ帰ル、休  
全十六日 松濱ヨリ帰、休ミ

全十七日 吉三郎老濱ヨリ帰ル

全十八日 洪塗丈本日相済ム、二度塗也

(一回塗り終リテ又キ洪ニテ一回塗ル念入ナリ)

八月十九日 門ノ柱トタンニテ根ヲ巻ク、武力屋飯田ニ托ス

全二十一日 亀谷兄ニ金拾円也渡ス、計金參拾円也

全二十二日 午前中ニテ仁王尊台座塗上□、是ニテ洪塗全方相済ム、細井へ

金四拾四円五拾九錢拂ス

全廿二日 亀谷氏濱ニテ買物調フ

全廿五日 松藤沢ニ行、漆求ニ

全廿七日 松濱行、買物為也

全廿七日 阿御面中へ木札ヲ納メ奉ル(別ニ文書ヲ記ス)

全廿七日 松本辨次郎ニ金網ノ話ヲナス、本日行貫藤

沢ニ漆買ニ行

全廿九日 松工事済ム、他ノ繕ヒモノ頼ム

三十日 繁蔵子息来院、仕事ヲ休シテ一日見物ニ行

全三十日 二躰共ニシヤビ塗出来上ル(全二十九日

武力屋へ五円八十五錢支拂ス、本日ヨリ松本金アミアミ始ム



(表紙)



(部分)

- 三十一日 修繕用□代二円十錢拂、□□兩人夜具代貳円八錢拂
- 二十九日ヨリ一日迄八四日間共ニ松太郎餘ノ仕事也
- 九月分

二日ニテ大異山額面下繕ヒ始ム、松太郎ノ仕事スム、○松太郎鳥渡手アキスル、  
 龜谷ノ仕事ニ行

- 全三日 仁王尊ノシヤビ塗相済
- 全四日ヨリ仁王尊トギ出工事始ム
- 全五日 トギ出工事始ル

全六日 午后ヨリカフキ塗始ム、本日人形師松太郎歸濱セリ

- 全九日 十日兩日ニテ尊躰中塗終ル
- 全十一日 上塗仕上始ム
- 全十二日 行貫藤沢ニ漆買行

全十三日 午后濱祭禮中ニ付、繁蔵一寸歸濱ス

全十四日 富士山兄入来、時絵師十六日ヨリ入来ノ旨申来ル

九月十五日 吉田松月齋老来リ(尾上町)、仁王尊修繕費中へ金壹円五拾錢寄附セラル

全十六日 時絵師伊藤、柴田兄ノ紹介ニテ入来、仁王尊衣ノ部時絵見積ノ事、金箔ニテ輪棒ノ定紋・天衣・□雲及大異山ノ額面共ニテ、悉皆ニテ金貳拾円ニテ請負渡シノ事

又松□□、本日汽車賃トシテ金六十錢渡ス

- 全十七日 繁蔵濱ヨリ歸ル、休ム
- 全十八日ヨリ廿三日迄ニテ塗師職□仕事一切相済ム
- 全廿四日ヨリ七日迄餘ノ仕事ヲナス

廿八日 塗師繁蔵即歸濱ス

十月ノ部

二日三日龜谷氏入来、最初ヨリノ総勘定ヲナス、相済ム  
 龜ヶ谷兼二郎氏ヨリ宮繕費中□金拾円也寄附セラル

全□ 午后三時時絵師兩人来院、明日ヨリ仕事ニ取力、ル事、仁王尊ハ金紋ヲオクコト

- 全四日 又時絵助手入来一名、時絵助手氏名左ノ通
- 伊藤玳次郎(□□町二丁目 百四十二番地)
- 伊藤銀雄(全長者町四丁目 四十一番地) 助手
- 高木□延(東京神田蓮雀町□□番地)

- 全七日 午後□時□、時絵仕□□、金箔總色ヨシノ切抜ヲ用ユ、大異山ノ額面ハ特ニ二枚ガケ切抜ヲ用ユ、本日富士山見分ニ来ル、柴田安太郎(吉三郎ノ長男)屋号富士山、氏ハ今般ノ工事ニ付陰陽ニ工事ヲ鑑督セラル、□□銀雄歸濱ス
- 八日朝時絵師二人歸濱ス、手間一切拂相済
- 九日仁王尊ヲ仁王門ニ安置シ、□□前田次助、請負松本弁二郎外人夫三人也、右ニテ安置シ納ル

十月  
 十日 早天仁□尊開眼供養作法ヲナシ奉ル、此レニテ仁王尊及門ノ修繕一切相済タリ

奉修補仁王尊像ニ願依此功德正法興隆眞宗弘通寺門清寧道縁具足無諸障礙淨業  
 增長維時明治三十六年九月十五日大日本帝國鎌倉大佛殿別當高德院從中興十二代住持善普行念欽白

修補者	轉法輪行念
全補助者	横濱市弁天通三丁目 横濱市末吉町通一丁目
柴田吉三郎	佛工 滝川繁蔵
全補助者	横濱市弁天通二丁目 佛工 東京浅草区柳町
龜ヶ谷兼二郎	横山松太郎

阿御面貌中へ入レ奉リシテ 木札ノ寫シ

- 仁王尊像修繕費扣
- 一金拾□円貳拾錢也
- 漆代
- 一金貳拾四円也
- 漆師四十八人手間
- 一金七円五拾錢也
- 人形師十五人手間
- 一金壹円八拾四錢也
- 右二人御車代二回分
- 一金壹円也
- 玉眼四ツ代
- 一金七拾六錢也
- 朱六紙金箔一枚代
- 一金三拾九錢五厘
- 砥石三個代

一金壹円四拾錢也 青漆粉三回求  
一金拾六錢也 カンレイ沙三尺代  
一金八拾八錢也 トノ粉  
ヂノ粉 代

一金二拾三錢也 □粉運賃  
一金壹円貳拾貳錢也 鍛冶屋拂  
一金拾八錢 釘代  
小計金五拾七円七拾六錢五厘也 □□□□  
受持勘定 □□□□  
十月二日

十月二日 塗師四十人賄料  
一金拾貳円也 人形師五人賄料  
一金參円 右二口高德院支拂

十月三十一日 金網代松支拂  
一金九円八拾五錢也 松本二人手間拂  
十一月三十日 仕事師手間拂  
一金九拾四錢五厘也

//十三日 濱義父礼煙草二ツ  
一金壹円貳拾錢也  
八月六日 バケツ一個代  
一金參拾五錢也  
九月中 釘代  
一金貳拾七錢三厘也 蒔絵師汽車代  
九月十六日 蒔絵師汽車代  
一金六拾錢也 蒔絵師手間  
八日

一金貳拾円也 蒔絵師手間  
六日 箔求行汽車代  
一金五拾一錢也  
八月廿二日 細井為吉へ拂

一金四拾四円五拾九錢也

同廿九日 武力屋拂  
一金五円八拾五錢也

八月十四日 大萬拂 大工手間  
一金拾六円七拾一錢四厘也  
九月廿八日 塗師へ骨折料  
一金壹円也 右十五口

合計金百拾七円九拾六錢二厘也  
支拂總計  
金百七拾五円七拾四錢七厘也  
以上

收入部  
一金百六拾四円貳拾四錢七厘也

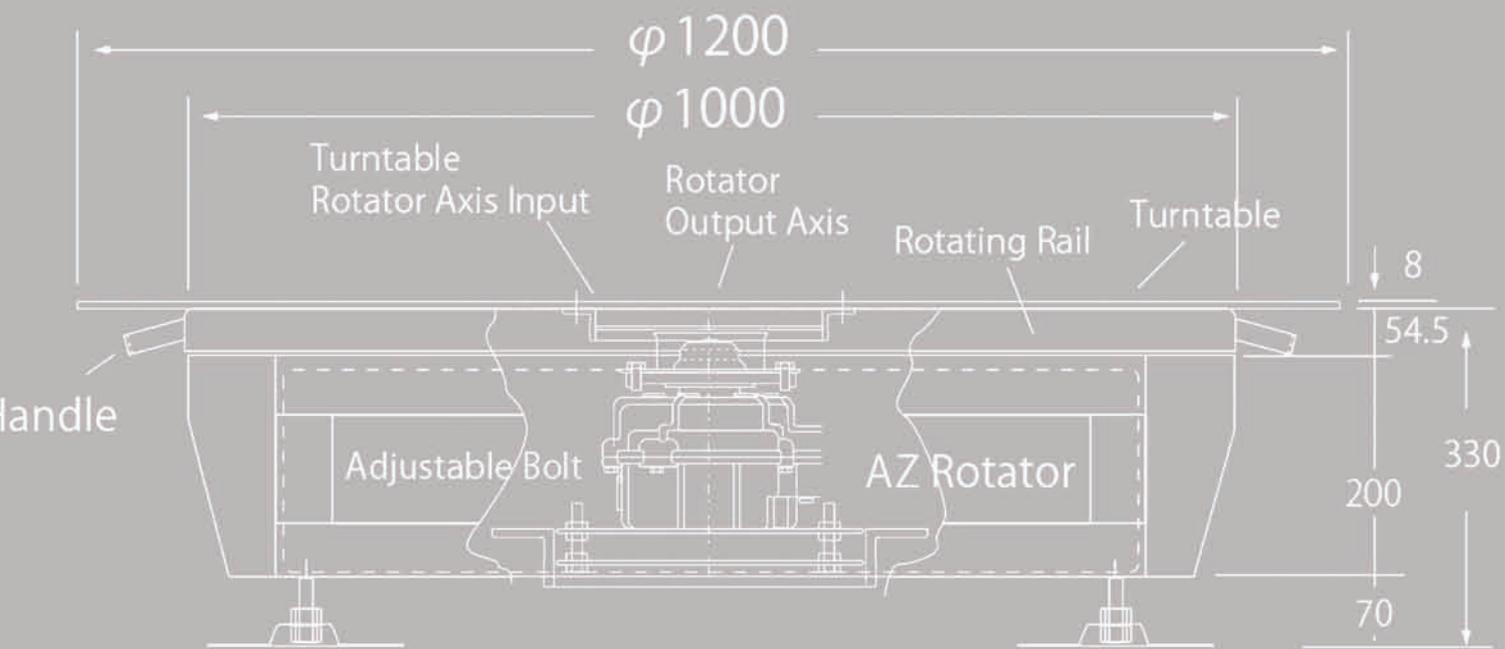
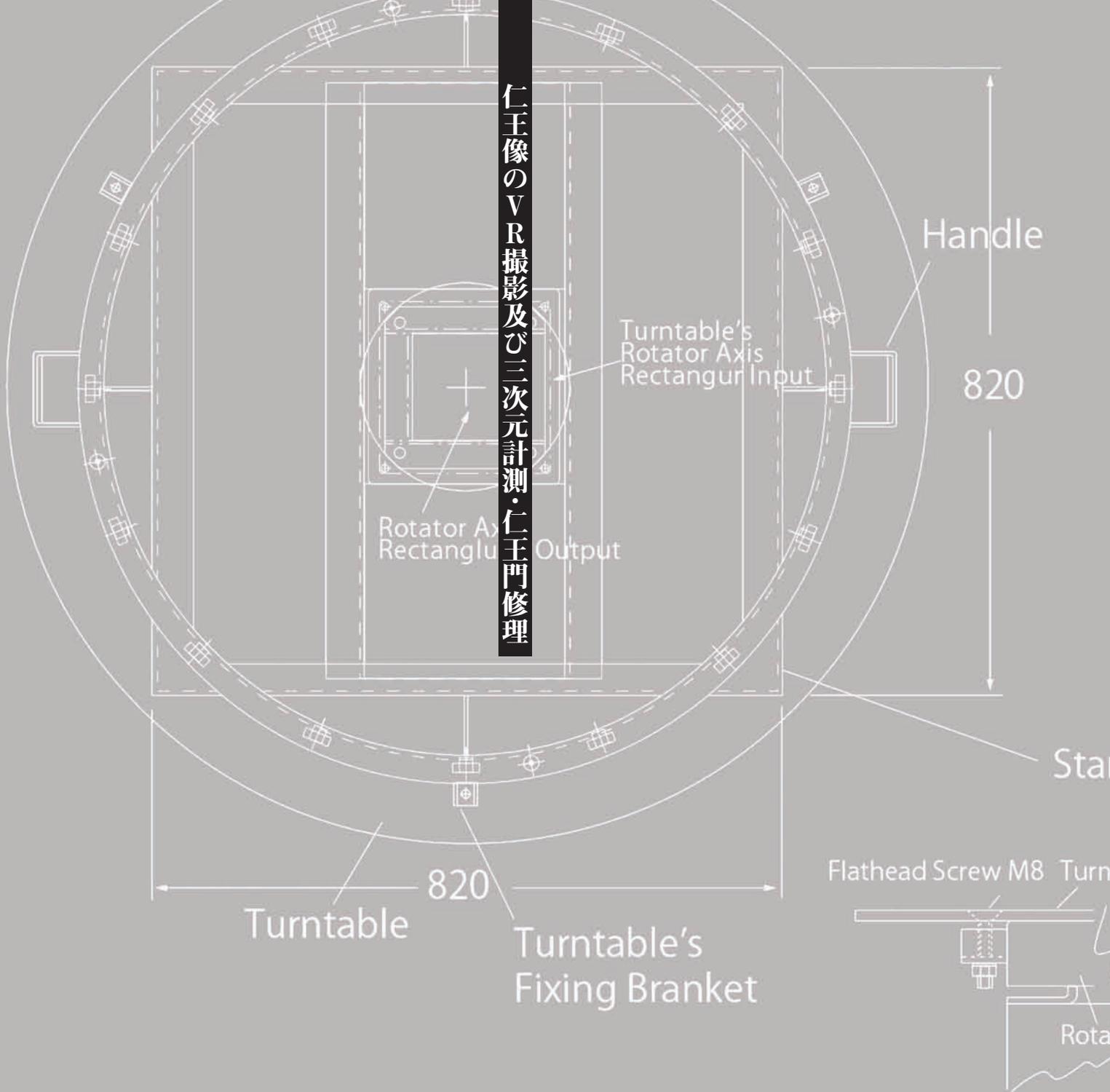
現住善譽行念寄附  
十月二日 龜ヶ谷兼二郎  
一金拾円也  
九月十五日 吉田松月齋

一金壹円五拾錢也 吉田松月齋  
×金百七拾五円七十四錢七厘也  
以上

前記仁王尊及仁王門修繕費ノ總額  
○金壹百七拾五円七拾四錢七厘也  
内行念自己ニ出金寄附シタル金額  
○合計壹百六拾四円貳拾四錢七厘也  
以上

明治三十六年十一月調査ス  
右ノ通ニ候也 轉法輪行念 ㊦  
(已上注歴書記入済)  
○仁王尊々躰ノ御長八尺五寸  
總御長壹丈也

仁王像のVR撮影及び三次元計測・仁王門修理



## 三六〇度フォトVRならびに三次元計測による御像外観の記録

鎌倉大仏殿高徳院の木造仁王像の修理にあたり、その前後の外観・形状の記録として三六〇度フォトVR（写真式VRムービー）の撮影・制作ならびにレーザースキャンによる三次元計測とコンピュータ・グラフィックス処理を担当させていた。ここで三次元計測とデータ統合処理については株式会社マイクロ・テクニカの協力を得た。

三六〇度フォトVRは、平成七年に米国アップル社が提唱した QuickTimeVR（QuickTimeによる仮想現実）のうち、立体物を対象とした QTVR オブジェクト・ムービーを先駆けとする。いち早くこの技術に着目した私どもは翌平成八年、QTVR オブジェクト・ムービーの素材となる立体物の三六〇度全周画像を一つレームずつ正確に撮影可能にするため、コンピュータ制御による二軸回転撮影装置「AutoQTVR」を開発し、以降、主として文化財のデジタル・アーカイブに応用させていた。フォトVRは、スチル写真を素材としながらも立体物を対話式に三六〇度回転して鑑賞できることが特徴であり、その画質は写真そのものであり、文化財の色・形を正確に記録し、かつ実物同等の存在感を追体験するために最適なメディアのひとつといえる。が、一方、スチル写真を素材としているがためにフォトVRにはその動きが水平垂直二方向に制限されるという表現上の欠点があった。また写真であるがゆえに立体物の形状を数値的に正確に記録することが困難であることも弱点と指摘されてきた。高徳院の木造仁王像の修理にあたり、その前後にレーザースキャンによる三次元計測を実施したのもそうしたフォトVRの弱点を補うためであり、また三次元計測を実施しておけば、コンピュータ・グラフィックによってそのデータから拡大縮小、回転、移動などを駆使し、より自由な仁王像の表現が可能になり、必要に応じてその容積や切断面などほとんど全ての形状計算も可能になり、将来的には最近脚光をあびている三次元プリンターによる御像のレプリカ制作も可能になるという利点もあろうからであった。

もともとレーザースキャンによる三次元計測にも弱点がある。そのひとつは、仁

王像のように複雑な形状を有する立体物の場合、レーザー光線が照射できない隠面が生じるのが普通であり、その部分についての正確な記録は欠落することになる。また、仁王像のような大きな立体物については、全体を幾つかに分けて複数回、部分ごとにレーザースキャンを実施し、後にソフトウエアによって統合するという処理が行われる。ところが、この統合処理が技術的にはそう簡単ではなく、原型同等の形状に統合することは事実上不可能に近い。つまり、レーザースキャンによる三次元計測といえども立体物の原型を完全に復元することは事実上不可能なのである。次に問題になるのが色彩である。レーザースキャンは、照射されたレーザーが立体物の表面にあたって反射する点の位置情報（XYZ）を記録するだけで色情報（RGB）は記録しない。従って、レーザースキャンによる三次元計測をもとにした立体物の復元には別途写真撮影等によって取得した色情報をテキストチャーミングという手法を使って色づけすることになる。そしてこのテキストチャーミングという手法も実際には完全ではなく、結果として文化財の形状記録としては必ずしも適切とはいえない「似て非なるもの」が出来上がってしまうのである。もともと三次元計測システムの中には、位置情報と色情報を同時に計測可能なビデオカメラを組み合わせたシステムも見られる。が、今のところその種のシステムにあつては、位置、色彩ともに精度に問題があり、文化財の形状記録としてはやや物足りないのが現状のようである。また、近年は、「写真幾何学」や「スリット光を使った光切断法」等の技術を応用し、立体物の周囲から撮影した複数枚のスチル写真から三次元形状を復元することも可能になり、そこで得られた三次元データから三次元プリンターに出力することも試みられている。ただし、文化財の原型復元には未だ精度的に無理があるようである。つまり、今回実施させていただいた三六〇度フォトVRと三次元計測は、仁王像の形状を記録する上で互いの弱点をそれぞれ補完しあうものであったといえる。

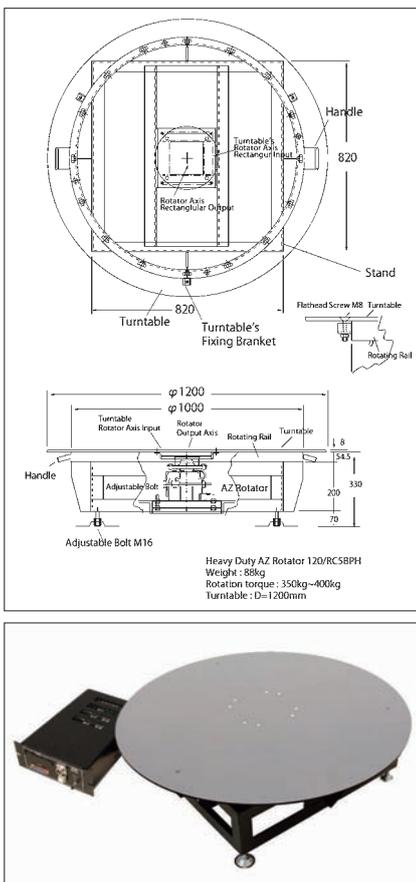
## 修理前のフォトVR撮影ならびに三次元計測

平成二十三年十一月二十一日〜三十日（高徳院境内仮設作業場）

### 大型水平ローテータの開発

三六〇度フォトVRの場合、全方向からの写真は水平垂直二軸の回転撮影装置を使って撮影する。しかしながら高徳院の仁王像は、本体だけでも高さが約二m半もあり、この御像を天頂から水平位置まで縦方向に等間隔で多視点撮影するためには高さ約四m以上の巨大な回転撮影装置が必要になる。今回、そのような巨大装置の開発は事実上不可能なため、全周の回転撮影は水平方向だけににとどめることにした。ただし、被写体の仁王像は台座を含めると約三五〇kg以上の重量になるため、その重量に耐えうるだけの堅固で安定した水平ローテータの設計からこのプロジェクトは始まった。

設計の条件としてはローテータの直径を普通ワゴン車で運べる最大の一二〇cmとし、既存のステッピングモータを使用して約三五〇kgの仁王像を安全に滑らかに回転できることとした。既存の水平ローテータの最大荷重は約一〇〇kgであったため、まずは荷重三五〇kgが問題であったが、この条件は直径一二〇cmの回転テーブルの外縁を最大荷重約一tの円形のローラで支え、その回転テーブルをステッピングモータの軸に直接荷重がかからないように箱型のギアを間に噛ませて回転できるようにしたことでもクリアできた。ローラの上を回転テーブルが滑らかに回転でき



AZ Rotator 120 概念図と完成写真

ば水平の負荷はそれほどかからない。従ってステッピングモータの軸に直接負荷がかからなければ少なくとも五〇〇kgまでは楽に回せるだろうという計算だった。仮にステッピングモータで回転できない場合に備え、ギアをフリーにして手動でも回転できるようにして製造に入った。実際、この水平ローテータは、完成後、大人六人（合計約四〇〇kg）が乗ってテストしたが、まったく問題なく回転することができた。水平ローテータは「AZ Rotator 120」と名付けられた。

平成二十三年十一月はじめ、こうして完成した水平ローテータ「AZ Rotator 120」は、修復前の回転撮影に備え、高徳院境内の一面に仮設された修復作業場に運び込まれようとしていた。ところが、数日前に御門から移送され、作業場の床に横たわっていた仁王像の状態が阿形像、吽形像ともに予想以上にひどく、足まわりについては特に損傷が激しかったために作業場で直立させることもままならなかった。従ってこのまま無理に立たせて回転させれば御像そのものが倒壊する恐れがあったため、修理前については回転撮影を断念し、御像を床に寝かせたままとあえず部分別にスチル撮影をするにとどめた。このとき撮影した部分

写真は後にスティッチング処理（結合処理）が施され、多少歪んではいるが阿形像、吽形像ともに全身を復元することができた。



スティッチングで復元された吽形像(左)と阿形像(右)

## 横たわったままでの三次元計測

レーザー स्क্যানによる三次元計測についても同じ理由で御像を寝せたままの状態で行った。使用したシステムは「Opttrak Pro」というカナダのNDI社製の高精度ポータブル三次元スキャナーで、そのハンディスキャナーの精度は二十四mm。パソコンに接続されたハンディタイプの非接触型レーザー スキャナーとそのスキャナーの位置を追跡する三眼の赤外線カメラから構成され、ターゲットから得られた点群の三次元座標はリアルタイムでパソコンに表示される。床に寝たままの御像は反転することも危険であったため、修理前の三次元計測はレーザー光線が届く表側半分に限られた。御像本体から既に外されていた部分については個別に計測し、後処理で本体と結合した。



三次元計測の実際(下)と吽形像(左上)阿形像(右上)のCG画像

## 修理後のフォトVR撮影ならびに三次元計測

平成二十六年二月十五日～二十五日(日本通運横浜倉庫)

### 三六〇度フォトVR撮影

修理後のフォトVR撮影は、あの大雪の降った直後の二月十五日から三日間、横浜の日通倉庫で行われた。倉庫は縦横一〇m×一五m、高さ六mほどの巨大な空間で撮影スタジオとしては十分すぎる広さだった。撮影当日、その一面に養生を施された御像二体が既に鎌倉から運びこまれ、私どもの到着を待っていた。修理後の重量は台座が約二〇〇kgと大幅に重くなっていたため、阿形像、吽形像ともに四〇〇kgほどになっていた。これほど重い文化財を回転撮影するのは初めての試みであったため、撮影は御像を回転台に載せるところから心配であった。設計上は一々までは耐えられる回転台ではあったが、実際、載せる際に荷重のかけ方次第では台座そのものが押し潰されてしまうことも全くないとはいえない。なかつた。そんな事態にでもなれば御像そのものも転倒して破損する危険さえあった。また、回転と同時にステッピングモーターが悲鳴をあげ、グリースが焼けて煙を吹き出すこともなくはない。と、とにかく心配の結果がつきなかつたが、実際の結果は上々だった。四〇〇kgの御像はフローリングの板の上を水平に滑らすという日通スタッフの手馴れた作業でらくらくと回転テーブルに載せられ、ステッピングモーターもいつもの快音を発しながらなんなく回転し、通常



400kgもの御像も楽々と回転台に載せられた

のフォトVR撮影となら変わりなく進めることができた。

「AZ Rotator120」による回転撮影は、専用の回転撮影ソフト「Object Master」を使い、回転の始点終点、シャッター間隔など回転撮影に必要なパラメータをプロジェクトファイルにセットしたあとは全て自動的に行われる。時々、エラーで撮影データ転送に失敗する場合もあるが、その際もソフトウエアが自動的に認識し、そのポイントまでモータを巻き戻して再撮影する。撮影を終了するとプレビューを起動し、回転の動きを低解像度でリアルタイムに確認する。この時点で発見されたミスショットについてもそのポイントに正確に巻き戻し、再撮することができる。オールデジタルである利点のひとつである。

修理後の回転撮影で使用したデジタルカメラは「CANON DX4」(五一八四×三四五六画素)で、照明装置としては、被写体の大きさや回転によるブレを勘案し、フォトVR撮影としては初めて大小のストロボ四灯を使用した。撮影ポイントは阿形像、吽形像ともに全体像を水平五度刻みで七二フレーム、更に御像を上中下に三分割し、左右一杯に拡大して同じく各七二フレーム撮影した。その結果、得られた画像セットは一フレームずつバッチで画質調整を施し、最後に必要なサイズにトリミングして「QuickTimeVR オブジェクト・ムービー」の「Flashムービー」に統合した。



フォトVR撮影はカメラの設定が完了すると後はコンピュータ制御で自動的に360度全周撮影が開始される。

### レーザースキャンによる三次元計測

修理後の三次元計測は、修理前と同じカナダのNDI社製の「Optitrak Pro」を使用し、御像は「AZ Rotator120」に乗せた状態で実施した。修理前は御像の移動が不可能であったために三眼のオプトトラッカーをその都度適切な位置に移動する必要があるが、横浜ではオプトトラッカーの位置は固定し、像を回転するだけで全周のスキャンが効率よく実施できた。ただし、三次元計測は非接触レーザースキャナーをできるだけターゲットに近づける必要があるため、床面から高さ3mにも達する頭頂部のスキャンには別途安全な足場を確保する必要があった。

三次元計測では、フォトVR撮影時には安全上装着できなかった「天衣」の計測を本体とは別に実施し、後に写真を参照しながら本体と結合させることができた。こうして得られた点群のデータはポリゴンデータ(Obj)に変換し、更にレンダリングして任意の角度から見たスチル画像、3Dアニメーションとしてファイリングした。



三次元計測後、天衣が本体に結合され、完全な形にレンダリングされた吽形像(左)と阿形像(右)

三六〇度フォトVR撮影及び三次元計測の結果得られたVRムービー及びCGアニメーション等は付属のDVD-ROMでご覧いただけます。

(株)テクネ 深沢武雄

# 仁王門修理について

木造仁王像の修理が進行する中で、仁王像が安置される仁王門にも修理を必要とする箇所があることがわかり、平成二十四年十月から翌年四月にかけて、仁王門と参道及び扁額の修理を実施した。

## 構造形式

八脚門、切妻造、屋根 銅板葺

## 修理前の状況

南を向く仁王門は、雨風や直射日光による陽射しの影響により、表面の劣化が進んでいた（写真1・2）。特に、向かって右側、阿形像の下部周辺は陽射しが強く差すため、塗膜の剥離が激しく、鉄製の金剛柵にも劣化が確認された（写真3・4）。

軒の鉄と銅を組み合わせた動物避けの金物は、金物の組み合わせが悪く劣化が進んでいた。

仁王門表面全体は樹脂系パテ材で覆われており、見た目では素地が木材であることが分かりにくい程塗膜が厚く施されていた。この影響により、水分が木材と塗料の間に浸透、木材の一部が腐食している可能性も考えられた。

銅板製の屋根には、大きな痛みは確認されなかった為、今回は修復せず、清掃作業のみとした。

建造物の構造としては、東日本大震災の強い揺れの影響も受けておらず、建物自体に歪み等は散見されなかった。



写真3



写真1



写真4



写真2

## 修理作業

### ① 試験施工

前回修理で塗装された塗料の除去にあたり、その除去方法を試験した。電動工具にて削り落とす方法と、ジクロロメタン系塗膜剥離材にて塗料を溶解する方法を実験した(写真5)。結果、部分の状況や塗料の厚みに応じて両方の方法を採用することにした。

### ② 足場の設置

清興建設株式会社により、仁王門全体に足場と覆い屋根を設置、休憩所もあわせて設置した(写真6)。



写真5



写真6

### ③ 塗料の除去作業

平成二十五年の年明けから、仁王門に塗られたウレタン系素材と思われるパテ材の除去作業を開始した。嵌板や垂木は、塗膜剥離材・ネオリバー#111を使って塗膜を溶解した。剥離材塗布後、約十〜十五分放置し薬剤を浸透させた後、溶解した塗



写真8



写真9

### ④ 新補材の設置

丸柱は、パテ材と寒冷紗で塗り固められており(写真7)、塗料の厚さが約5mmと厚かった為、電動サンダーをつかって剥離した。

膜をスクレーパーまたはワイヤーブラシ等を使って取り除いた。一度で塗膜が取りきれない場合は、二・三回この作業を繰り返した。刷毛による水洗いを行い、残存する溶解塗料や剥離剤を除去した後、表面を乾燥させた。水洗で除去しきれない溶解塗料や剥離剤は必要に応じて高圧洗浄を行った。

損傷が特に目立った阿形像の金剛柵上部の腰貫は取り外し、新補材に取り換えた(写真8)。鉄製の金剛柵も取り外し、木製に新調した。



写真7

### ⑤ 下地処理

塗料を除去し、木材の素地が確認できるようになった段階で、サンドペーパーを当てて表面を整えた。木目や割れ目に入ったパテは、刃物やサンドペーパーを使って除去し、必要な箇所には埋木を施した。また、虫食いや、蒸し腐れが発生している箇所、ひび割れが大きい箇所にも埋木を施した(写真9)。

### ⑥ 固め

塗料で山門全体を彩色する前に、CGを使って仁王門の仕上がりイメージを制作した。変色しにくい性質を持つ弁柄を使用することが決まっていたが、弁柄に黒色を混ぜることで、より色味を落ち着かせたパターンなど計三案の色見本の中から色を選んだ。

塗料材には弁柄が練り込まれた合成樹脂エマルジョン塗料・水性建物用(茶)を使用した。

下塗りとして塗料を水で希釈したものを筋違刷毛で全体に塗布し(写真10)、木地に塗料を含浸させた。乾燥させた後、次に塗布する中塗り塗料との接着を高めるため、サンドペーパーをあててから、中塗りをした。再び乾燥後にサンドペーパーをあて、上塗をして仕上げた。



写真10

### ⑦ 彩色

上部から順に、墓股の菊紋や渦紋、木口部分を彩色で仕上げた。下地として白色を塗り(写真11)、その上からアクリル樹脂にて彩色を施すことにより、塗料の色彩をより鮮やかに仕上げた。墓股や小口の色を決めるにあたり、実際に色を変えたパターンで塗り分け、最終の色を決定した(写真12)。



写真11

### ⑧ 金物の新調

破風の押・尻八双と桁木口には銹金物を取り付けた。銅板を打ち出し、緑青色塗装及び金箔押しを施した。押み及び尻八双には唐草をイメージした透かし模様を入れている(写真13)。

動物避けの金物には、真鍮のフレームに銅の網を施したものを設置した。

### ⑨ 基礎と参道引き石の補修

仁王門修理中に、礎石のコンクリートに割れている箇所が発見されたため、仁王門修理と平行して基礎の補修工事を実施し、参道の引き石とともに修繕を施した。



写真12



写真13

仁王門扁額 木造 縦五九・二cm、横一三三・五cm

高德院仁王門には「大異山」の三文字からなる扁額が掲げられている。

文字の彫り込まれた額面（四二・〇cm、横一一・二・五cm、厚約二・五cm）の四周には、框を取り付け、框の前面周囲に繰形付の額縁（立ち上がり約一〇cm）を付していたものが旧態と考えられる。おそらく框は後世に欠失したとみられ、その痕跡と思われる数多くの釘跡が残されていた。額縁は花先形を周囲に巡らせており、框部分に釘止めされていたと考えて差し支えないのではなからう。

額面ほぼ中央より均等に「大異山」の陽刻三文字を配し、左上には署名「林峰」（陽刻）とその下に方印（陰刻）がある。特に文字部分と額縁の繰形部分には下地とみられる弁柄漆が数カ所のことされていた。

扁額全体は素地の傷みが激しく、額面は中央にまで及ぶ亀裂や左端部の欠損・欠失、そのほか多数の腐蝕した釘穴、さらに額縁部分には数箇所の亀裂と脱落、それに伴う材の欠失などが確認された。特に、額面は亀裂が激しく左上部などは脱落の危険も充分考えられた。

当初、扁額修理の予定はなかったものの仁王門修理を行うにあたって精査した際に、右に述べたように扁額全体の損傷も激しく、今後脱落の危険も充分考えられることから、関係者合意のもと、仁王門修理と並行して保存修理を行うこととなった。以下、修理の概要を述べる。

- ① 扁額全体の清掃を行った（写真14）。
- ② 額縁、額面の解体を行った（写真15）。
- ③ 釘穴の清掃、錆びた鉄釘の撤去（写真16）。
- ④ 損傷により脱落の危険な箇所は一旦取り外した。
- ⑤ 欠失箇所は新補した（写真17）。
- ⑥ 釘穴は松と木屎漆で埋め木した。額面に見られる大きな亀裂は背面より「ちきり」を施し開きを止めた（写真18）。表面の小さな亀裂は敢えて埋め木をせず自然のままとした。
- ⑦ 文字、及び額縁繰形部分については漆による木固めを行い漆下地に本金箔押しとした（写真19）。



写真18



写真17



写真14



写真19



写真15



写真16

## あとがき

早いもので、高德院木造仁王像の修復が始まって三年半が経とうとしております。

仁王像は仁王門の左右に安置され、大仏様（銅造阿弥陀如来坐像）に向かう人からはとかく見過ごされてしまうのですが、ある時ご住職から仁王像がかなり傷んでいるので修理したい、については監修をしてほしい旨のご依頼がありました。たしかに改めて拝見すると、思っていたよりもかなり朽損していることが分かり、すぐに承諾いたしました。平成二十三年十月二日発遣の法要が仁王門において行われ、修理にとりかかりました。

解体修理は、(尙)光圓美術研究所によって実施されましたが、その間の仕事を通していえることは、材の一つ一つの扱いが丁寧であったこと、修理の方法について何度も議論を重ね検討したこと、今後何十年何百年という長期間に耐えられる補強に心掛けたこと、「玉眼」に水晶を使用するなど、想定される本来の姿に近づけたことなどでした。そして修理の記録として、像の修理前と修理後の写真撮影を写真家井上久美子氏にお願いし、デジタルカメラによる修理過程の撮影を光圓美術研究所が行いました。

また像の修理とともに、高德院の法灯と仁王像の文化財としての意義を将来に伝えるための事業も並行して行われました。一つは井上氏撮影の修理後の写真を(株)便利堂でコロタイプ印刷したこと、もう一つは(株)テクネにより修理前と修理後のVR画像の撮影と三次元計測を行ったこと、さらには創芸により仁王門全体の塗装、柵、石材基礎などの修復をしたことです。仁王像の修理は、平成二十六年三月に無事終了し、四月二日に開眼供養が厳粛に執り行われました。

この報告書は、これら事業の記録すべてと、歴史的考察として鈴木良明氏「近世鎌倉大仏の復興と仁王像」と拙稿「彫刻史から見た高德院仁王像について」を掲載しました。特に修理過程の記録写真約一二〇点をすべてカラー図版で載せることができ、修理報告書としては例がないものになったと思っております。

最後になりましたが、この平成大修理の実施と、研究、保存、教育など将来のためになる報告書の作成を決断された、高德院住職佐藤孝雄氏と、長期間にわたり仁王像の修復に尽力されました瀧本光國氏とその工房に対し、深く敬意を表するとともに、ご協力いただきました多くの関係者の方々に、監修の任に当たった者として感謝申し上げます次第です。

平成二十七年三月

修理監修 清水眞澄

修理関係者

修理監修

三井記念美術館 館長 清水眞澄

仁王像・修理

(有)光圓美術研究所 代表 瀧本光國、同研究所 神山藍輔 齋藤浩史

写真撮影（修理前・後の全像）

井上久美子

仁王門修理

創芸 代表 倉山剛

VR画像撮影・三次元計測

(株)テクネ 代表 深沢武雄

協力者

當間浩昭（二伝寺住職） 當間伸行（延命寺住職） 吉田佳之（蓮乗院副住職）

番匠井上有限会社 清興建設株式会社

敬称略

鎌倉大仏殿高德院 木造仁王像 平成修理報告書

発行 鎌倉大仏殿高德院

〒248-0016 神奈川県鎌倉市長谷四丁目二番二十八号

発行日 二〇一五年三月

制作 株式会社 便利堂

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町三〇二番地

表紙デザイン 瀧本小春

